

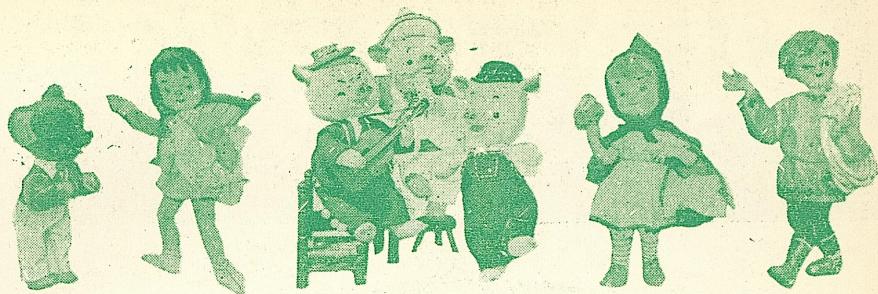
家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十四卷 第四號

日本国イタリアニガラニスルノカナハ





総天然色 トツパンの人形絵本

- (1)あかずきんちゃん (4)三びきのくま
 (2)じゃっくとまめのき (5)三びきのこぶた
 (3)びーたーとおおかみ (6)ぶーぽんせんせいの
 あふりかたんけん
- トツパンの絵本はフレーベル館または代理店にてお取次ぎいたしております。
 厚くて丈夫な貼合せ絵本 各100円

トツパン 東京日本橋茅場町1の20・振替東京41647



新刊 御案内

倉橋惣三著

子供讀書

内山憲尚著
インドのお話集

A五・一七六頁 定価二三〇円

村上幸雄編
劇集 幼児

A五・一七六頁 定価二三〇円

あわてうさぎ

はるのひよこ

長田 新著
フレーベルに還れ

B六・一九四頁 予価二〇〇円

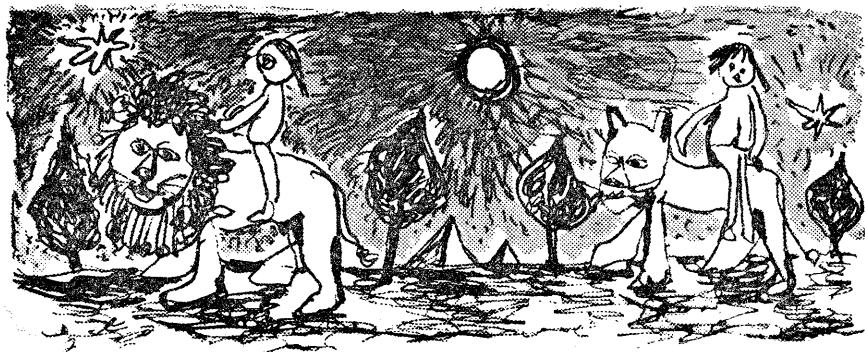
幼児教育のみちしるべとして
多年ご高評をいただいており
ますフレーベル館の保育図書
は、永年の歴史と、保育界の
絶大なるご後援のもとに、編
集刊行いたしております。



株式会社

フレーベル館

東京都千代田区神田小川町2ノ5 電話東京(29)7781~7785 振替東京 19640



目 次

表 紙 鈴木信太郎

保育室のふんいき 及川 ふみ 2

保育研究の方法について 西本 優 6

幼稚園における問題児とその指導II 海卓子 11

新入幼児を迎えるための環境設定と心の準備 北村次子 18

☆ この頃の私の幼稚園 佐藤 実 21 ☆

☆ 兼任園長覚書 菊田 要 26 ☆

☆ 子供の間に作られる歌について 久留島 武彦 29 ☆

☆ <海外通信> 学校から家に帰るまで 31 ☆

☆ アメリカ大使館文化交換局提供 31 ☆

書評 高崎 穂 33

『第2回 幼稚園教育要領(案)とその問題 宮内 孝 34

雑記帳 村井トミ 41

▷ 保育における童話 上沢謙二 43

連載 幼稚園史(3)

フレーベル以後の幼稚園 津守 真 47

編集主幹
協力委員

倉橋物
牛島義友
多田鉄雄

及川ふみ
波多野完治

津守真
山下俊郎
(五十音順)
斎藤文雄
藤原文雄

保育室のふんいき

及川 ふみ

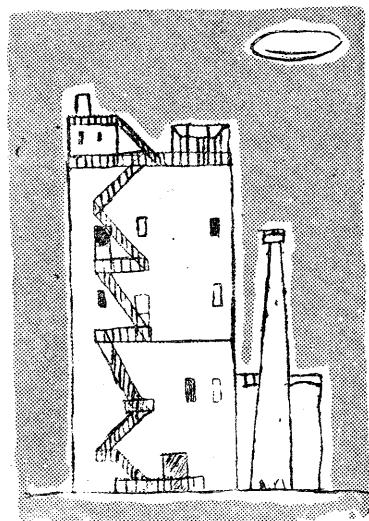
一、春のひざしを充分にあびた、あたたかい明るい保育室では、年長組になつた幼児が七、八人うれしそうに語らい合ひながら、粘土製作をしている。そのグループの中に大人（教育実習の学生）が一人まぎつてゐる。手を膝の上に組んでたゞ子どもたちの仲間にいるだけである。そしてその表情は、自分はどうしていたらよいかという不安定な様子でいる。

この保育室での、子どもたちのたのしいそしてほりきった様子と、そのそばにいる大人の不安定な態度、この二つの不調和と云おうか、保育室のふんいきに、このあかるい、そしてあたたかい保育室に一まつの暗さが見える。

同じく子どもの仲間に入つた大人であつても、教育とか指

導とかいう気持ちを全然もたない大人が、子どものこうしたグループに入つた場合を考えて見ると、或はその人その人の性格があらわれて、いろいろの形で、子どもとの接觸がはじめられるであろう。ある人は素直に小さい人たちに積極的に進んで、何か作ってみせようとか、或は教えようなどの様子をして、自分の弟や、妹に対する気安さで入つてゆく場合もあるであろうし、又人によっては子どもは子ども、自分は自分といふことで周囲の様子には無頓着に自分のもち味で進んでゆく人もあるうと思われる。

この保育室の粘土の仲間入りをしている大人は、自分は幼稚園の先生の卵であるという心がまえの所持者であるから、



気安な調子で手が出せないし、言葉も出せない。又やたらに自分で勝手に何かつくつてみるとどうじるまでもいかない。つまり子どもの製作の場にあっての先生のあり方はどうすればよいか、どうして迷いがある。無頓着ではないがしかしどうすればよいかという不安定の気持ちのまま、そのグループの中にいる様子がいかにも明るくない影をおどしている。

教育実習の指導にあたる人は、この類の保育室のふんいきには敏感であってほしいものである。そしてその場その場での指導には、いろいろの形があろうからただ一つの道だけでは勿論ないのであるが、実習の初期には、子どもたちの一生懸命とか、一心ぶらんとかいうふんいきをこわさないことに先づ心してもらいたい。「あなたの作れるもの何でもよいから勢一ぱい作ってごらんなさい」という助言によつて彼女はいかにも救われたという表情でせつせと粘土製作にはいつた。

二、子どもが大工仕事をしている。そのグループで一人の学生が、子どもの手助けをしていて。子どもは汗を出して板ぎ

れを切っている。学生は不精らしい姿勢のままで鋸を動かしている。素人大工の手つき、からだつき、勿論結構であり、当然である。ただその熱意のある態度である。子どもたちは一つの小さい板きれを切るとき、どうしてもこれを切りとるというその強い意気での小さい手で、最大の力と、そしてそこから出る自然のよい姿勢で鋸を動かしている。ある時は床の上に座りこんで力一杯に金槌を振りあげて釘をうつているものもあれば、片脚を強くふみしめて鋸を動かしているものもある。大人は子どもがする様に、金槌に全身の力を注がなくとも比較的らくに釘をうちこむことが出来るであろうし又片脚で強くふみしめなくても、板きれが容易く切りおとされる事であらう。ここでいいたいことは子どもの大工仕事の仲間入りをする大人の態度である。大工仕事に対する真けんさの態度である。一生懸命の態度は強さがあり、たのもしさがあり、美しさがある。力あまつて熱意のたりない態度は弱さを示し、みにくさがある。子どもの仲間に入つてゐるのはどうじるもので、子どもの態度を損じてはならない、どんな仲間入りをしていても。

三、子どもの表現をどこまでもつづけたい。子どもの絵や、製作の第一のねらいは、子ども一人一人がそれぞれ個人個人の特性、もち味がいきいきと表現するということであろう。絵をかいている時も、おあちゃんを作っているときも、そしてその出来上った結果のしまつも子ども自身の手によつてすることである。花壇を一クラス全体の共同製作として計画をたてたとして考えて見る。

春の季節の花を子どもたちと話しあってそれぞれにすきな花を作ることにする。花の種類はあとより数数あるし、同じ花でも作る子どもによってちがつて出来る。形の大小、色の調子、簡単なもの、複雑なもの、様様の差はあっても子どもらしさはどれにも共通の表現である。個々の花つくりで終る場合はこれで無難である、がしかしその一人一人が作った花を花壇にまですすめる場合である。個々の花のあり方そのままの子どもの表現による花壇であるべきものを、時には大人のよけいな手傳いや、さらにまとめは全部大人の手で、大人の考えで、とこうことである。そこで折角の子どもの表現のかげが弱くなることである。つまり一人一人子どもらしく作られた草花が、共同製作の花壇の花になる場合に大人の考え

で処理されていて、子ども自身の花壇でなくなることである。

子どもたちが自身の考えて一つ一つの花が配置されてこそ一つ一つの花の感じがその花壇の表現にもつづいてくるわけである。子どもたちはものの大小の関係、遠近、粗密の程度など、まだよく理解出来ていないままに大膽に、無造作に、そこにならべることであろう。

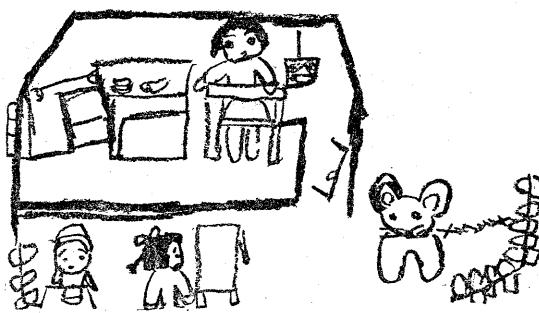
保育室の壁面その他で、子どもの作品で、季節季節の風物花や、鳥や、虫の類などによつて美しく飾られていることはどこにもよくみられる情景ではあるが、作品の後半に大人の出すぎた処理によつて保育室のふんいきを全然損ねられることもしばしば見受けられることである。

四、おままととの諸用具について

この頃の保育室にはその片隅に、おままととの場が常設せられているところが多いようである。まことに子どもたちにとっても、大人にとってもよろこばしい傾向である。保育室の広ささえ許されればよい。そこで問題はその構えや調度にあるようである。台所の戸棚や、垣根にしても、子どもらしさ

の素朴さをくずさないことにあると思われる。専門の指物屋の手によって作られた、ととのいすぎた台所の戸棚や、或は寝台や、テーブルその他の調度はいづれも大人のみの角度からの出来上りで、実際的ではあるけれども、保育室に備えるおまかごと用具としてはゆきすぎた点もあり、不調和でもある。素人作りの不手ぎわな、素朴さが失われている。垣根などの調子でも大工さんの作る本ものの垣根の感じは、堅くてきゆうくつな感じがする。素人の大人や、子どもたちとの共同製作によって作られている垣根は材料の関係や、仕事の不手ぎわや、その他のことから、高さや、幅や、或は板の打ち方などの点でまがぬけていても又そこに面白さがある。窓のあけ方、扉の様子、色のぬり方、調度の数数、出来るだけ、子どもの世界の線を守っていきたい。経済的の方面からもこれにはどちらからも異議はないはずである。

おまかごと遊びの子どものらしさの感触が、そのかまえ全体の上にも、その調度の上にも、あらわれていることがうれしいことであって、子どもの表現活動をどこまでも尊重するものの考えなければならない大人の態度であるとも云える。



(カットは子供の画いたもの) 要の点である。10頁に続く

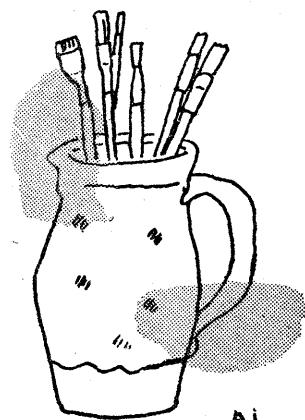
一、二、三と保育室のふんひきについて、日常幼稚園の実際のところどころの現場から拾ったものをひいてみたのですが、最後にこのいろいろのふんひきを包む大きな輪廓である保育室のかまえはどこまでも大きな太い線で子どもの生活する場所として大人の設計によって建造されることは又別

意味で根本問題である。つまり幼稚園全体、或は個々の保

育室の構はどこまでも、しつかりとして重みがありおちつきのあることは、すべての基礎盤である。ただ室の明さ、壁の色彩などの点も考えられることは勿論であるが、これ

があまりに過ぎて、子どもの常時の居所として、おちつきのある態度で遊んでいるかどうかをよく観察することの必

保育研究の 方法について



西 本 倩

これまでの保育学は、一般的の教育学と同様に、最初から保育の目標を定め、それを達成するのに、何を（保育内容）、どのように（保育方法）することが必要であるかを考究し、いたづらに保育学の体系を作ることに熱中した傾向がありました。したがってこのような保育学は、保育の実際問題を解決するのには、余りに一般的、抽象的にすぎて、實際には何の役にも立たないものとなっていました。

二

た。それは、保育の研究法がまちがっていたからです。実際の保育に役立つ研究をし、保育の効果をあげるために、その研究の方法を更に研究してみなければなりません。従来の保育学に対して、保育研究法を確立することが必要となってきたのは、そのためです。

今回は紙面も限られていますので、個々の方法を詳細に述べることはできませんが、これで、問題とは、いつも実際問題であり、解決とは事態の改善の方策です。ですから、保育研究は、保育学の体系を作ることが目的ではなく、一般的な法則・原理を発見することが第一義的な目的なのであります。目的はどこまでも、現実の事態を改善するための方策を発見することであり、保育の実践に計画性を与える、それを一層合理的、能率的にすることなのです。

最近は、よくあちらこちらで保育の研究会

が、この言葉はいろいろの意義に解されると思います。ここでは、保育の科学的研究の方法という意味に解しておきましょう。この意味での保育研究とは、グッドの云つているように、「保育に関するすべての問題に対しても得られる限りのものともよい資料にもとづいて、批判的反省的思考によつて解答することである」と定義してよいでしょう。つまり、保育に関する問題を解決するため、できる限り正確な資料を集め、それにもとづいて考察をめぐらし、実際的な解決を与えようとすることなのです。そして、問題とは、いつも実際問題であり、解決とは事態の改善の方策です。ですから、保育研究は、保育学の体系を作ることが目的ではなく、一般的な法則・原理を発見することが第一義的な目的なのであります。目的はどこまでも、現実の事態を改善するための方策を発見することであり、保育の実践に計画性を与える、それを一層合理的、能率的にすることなのです。

が開かれますし、どこの幼稚園や保育所でも保育に関する研究熱が非常に高まつてきており、自分も何か研究をやってみようと先生方に積極的になつてこられたことは、保育界の発展のために、まことにやるべきことだと思います。けれども、うつかりすると、人がするから自分もするというように、研究が一種の流行のようになつてしまわないとも限りません。ですから、ここでもう一度、私達

は一体何故保育研究をしなければならないのか。何のために保育研究をするのかということを考えてみなければなりません。私はよく幼稚園や保育所の先生方から、つぎのような相談をうけることがあります。

「先生、私の幼稚園で今度研究保育があるので、どんな問題をとりあげたらいいでしょうか」

「先生、私はうんと研究をして、少しでも保育界にお役に立ちたいと思いますが、どんな研究をしたらいでしようか。現在の日本

の保育界において、もっと重要な問題は何でしょうか」

「先生、今度の研究会には、園を代表して

私が研究発表をするようにと園長先生から云われ、一旦お断りしたのですが、『みんな順番にやつてもらひので、今度はあなたの番です』とのことで、私がしなければならなくなつたのですが、何かよい研究テーマはあります。けれども、うつかりすると、人

がこんな時には、どう返事をしたらよいか全く困ってしまいます。断つてしまうのは、余りに氣の毒だし、そうかと云つて、先方の園

の事情もよく知らない私がすぐに適切な問題を思いつくこともできずに……私達は何のために研究するのでしょうか。研究保育のた

めに研究するのでしょうか。それとも研究会に発表するためにでしようか。あるいは、本に書いてあるような保育をやつてみるために研究をするのでしょうか。——ちがいます。これでは、

研究の動機、目的が本末てんとうしてしま

す。私達が保育の研究をするのは、学説のためや本のためでもなく、研究発表のためや幼稚園のためでもありません。それは、今更こ

と新しく云うまでもなく、児童たちのよりよい成長のために、よりよい保育をするために、が、保育研究です。たえず、保育研究によ

る実践の場を離れて、方向ちがいの動機から保育研究をしようとされるのは、――非常に残念なことであると思います。

要するに、保育研究は、私達に対して、外から与えられる問題について研究されるものではありません。またいわゆる理論家の唱える理論を証明したり、実験したりするためにであります。私達の現実の保育の場における保育の実践から提出される問題について、――日々の保育の実践のうちで、見つけたことや困ったことが問題として提出され――その解決の仕方を要求するものです。したがつて問題は保育の実践によって発見され、その解決を要する問題の所

であります。このことを忘れた、研究のための研究とも云えるような研究態度の人が時々見つけられるのは――とくに保育の現場における保育者が、何よりも自分達の強味である実践の場を離れて、方向ちがいの動機から保育研究をしようとされるのは、――非常に残念なことであると思います。

つまりはありません。ですから、研究問題は私達一人一人の置かれた条件によって異なるものであつて、一般的に、どんな形で、どんな規模で設定せられるかをきることはできません。外から見れば、ささやかな、つまりぬ問題とみえるものであつても、ある先生が幼児のために、それを解決し、処理しなければならないものとすれば、それは、その先生にどうては重大な研究問題となります。

ここで問題になることは、大学の保育学と保育の現場との関係についてです。従来はこの二つが、本当の内的な関係を持たず、どちらであったのが、日本の保育界の弱点であつたと云えると思いますが、これからは両者の関係はどうあるべきでしょうか。現実の問題の解決に役立たない保育学は結局無意味であることは確かです。けれどもまた、現場の具体的な問題をただ現象的に追いかけて、そ

は、一方、学者あるいは研究者側が何といつても、保育の現場の問題にもと本氣で目を向け、現場の保育者と一しょに、その解決に努力することが必要です。日本の学者や研究者は、ともすると日本の現代の保育の実情を問題にするのではなく、外国の書物のほん訳や紹介から出発し、時とするとそれだけで終りしまるきらいがあります。そういう「やきなおしの学問」では、保育の現場の要求に本当に応ずることができないのは当然です。

今後更に大学の保育学の学者や研究者と、けれども、一方ではやはり現場の保育者の協力が必要です。日々に解決を要する多くの問題に追われている現場が、それを解決してくれる保育学に対して不信をいだくのは、もつともなことではあります。保育学を本当に役立つものにするためには、現場の積極的な協力が必要なのです。そのためには生きた問題を学問に投げつけることです。学者や研究者がついに本当の問題をとりあげなければならなくなるまで、何度も強く、しつこく訴えることです。どんなさやかな形でも、どんなつまらないような問題でも。それとともに、もう一つ現場の保育者にお願いし

たいことは、やはり、現場の保育者の識見、教養を向上するように努力していただきたいことです。ただ何でもやたらに困つている問題を提出するのではなく、その間の軽重本末を見きわめるだけの識見。いたずらに流行にわざわざされたり、人の云うことによく引きまわされたりしないで、しっかりと現実に脚をつけて迷わされない識見がほしいものです。

前にも述べました通り、保育に関する研究は、大学の研究室に限られるものではありません。もちろん、研究室における学者の研究も、保育研究上欠くことのできないものではあります。それが、それと同時に、幼稚園・保育所において、はじめておこなうことのできる研究が沢山あります。つまり、研究室や実験室のように、特別な条件のもとではなく、普通の条件のもとで、保育が現実に行われている

園においてこそ、はじめて完全におこなうこと

であります。

とのできる研究があります。しかも、実際の保育に対する態度をもつとも大きな貢献をするのは、このような現場においての研究です。ですから、園長や保育者は皆保育研究上重要な責任をおわされているわけです。したがって

園長は、出くわす種々の問題に対して、研究的な態度をとるべきですし、またその配下にある保育者の研究的態度を刺げきし、その研究を発展させるように力を尽さなければなりません。

けれども、保育者や園長が研究に従事するのには、現状では、多くの障害があります。その障害の一つは研究に必要な時間とエネルギーの不足であります。多くの場合において保育者の負担は過重であって、研究するための時間がありません。何とか工夫をして、研究時間を作つてほしいものです。更にそれ以上に、現場における保育研究の障害となるものは、恐らく多くの保育者が、研究法を知らないことでしょう。今回は紙面の關係上、この点に触れられないのは残念ですけれども、今後機会あるごとにお話ししてみたいと思つ

与えられた紙面がもうほとんどなくなつてしまひましたので、まとまりませんでした。最後に今後に残る保育研究の問題を簡単にあげてみましよう。

1、幼児期の成長と発達に関する研究——

外国の子供についての発達標準はよく紹介されていますが、日本の子供の発達標準の研究が乏しいようです。現在日本保育学会の共同研究が進行中ですが、これが完成すれば、定期的なものとなるでしょう。尙今後の問題としては、標準的な発達からのずれの問題、つまり発達の個人差について研究すべきでしょう。又いろいろな能力のレディネスについての研究も必要であると思います。

2、幼児教育に関する研究——保育カリキ

ュラムの作製について、こちらから幼児についてがうのではなく、幼児達の中から生み出すのにはどうしたらよいかという問題。いろいろな保育方法についての実証的な研究——Aの

保育法とBの保育法と、どちらがどれだけす
ぐれているかと云うような実験的研究。一人の幼児に及ぼす影響に関する実証的研究。

3、幼児教育の効果に関する研究——何年間保育するのがよいか。(一年保育、二年保育、三年保育の比較研究) 小学校に入学してから後の、幼稚園に行かなかつた子どもと行った子供の成長発達についての比較研究。幼稚園教育の効果があるのは、どの方面の発達においてか。効果がないのはどの方面か。

4、特殊保育に関する研究——盲児、ろう児、精神遅滞児、肢体不自由児、天才児などの保育について、保育内容、保育方法等の研究。

5、保育者に関する研究——保育者の望ましい資質について。保育者の精神衛生について。

6、政治的経済的問題に関する研究——

幼稚園と小学校との関連性について(教育制度・教育行政) 幼稚園・保育所間の問題。幼稚園についての研究。一組の幼稚園数をどの位にしたいよいか。(四十人は多すぎると思う) 又一園の園児数はどの位がよいかという問題。音楽リズム、絵画製作等々の個々の保育内容についての理論的研究。

法についての研究。一組の幼稚園数をどの位にしたいよいか。(四十人は多すぎると思う)

であります。

したよいか。(四十人は多すぎると思う)

であります。

園・保育所の施設・設備等の問題。教育財政

昭和二五年

問題。

要するに、保育研究は、何も学者や専門研

究者の独占するものではありません。私達一

人一人が研究者としての責任を負っているの

です——幼児達の幸福のために。自分には

研究者としての資質がないなどと弱音をはか

ないで、どんな小さな問題でもよろしいから

勇敢に一つの問題ととくんで下さい。若し

自分一人の能力では手におえない時には、共

同研究をしてごらんなさい。いろいろな方面

の資質、能力を持つている人々が共同して、

勇敢に一つの問題ととくんで下さい。若し

自分一人の能力では手におえない時には、共

同研究をしてごらんなさい。いろいろな方面

3、宗像誠也 教育研究法 新評論社 昭和二九年

4、石山脩平 教育研究分野の概観（教育科学）第二十冊 岩波書店 昭和八年
大学講座三五「教育研究法」）金子書房 昭和二六年

個々の研究方法を十分に会得したいと思う人にとっては、これらの文献では不十分です。その場合には、それぞれの方法によつて今までになされた研究の報告を精読するのが最もよい勉強法であると思ひます。それには、

▽5頁より続く 部屋があまりに明るすぎて子どもが自ら遊ぶ場所を自然に窓を遠ざけている実際を見るときに、これら等の点についても大人は考えさせられることが多いのではなかろうか。すべては子どもの生活する場として最もよかれと考へることで常に現在に満足することなく、よりよき環境ふんいきの考慮は勿論であるが、あまりに極端なゆきすぎはお互にいましめたいものである。

は、基礎的な識見、教養を高めるように、いつも心がけてゆきたいものです。

5、月刊雑誌「児童心理」 金子書房
6、「幼児の教育」 フレーベル館

7 「保育」 昭和出版

にのつてある研究報告がよいでしょう。

(この一文を草するに当り、特に宗像誠也

先生の御指導に対し、厚く御礼申し上げま

す)

全国私立幼稚園名簿

日本私立幼稚園連合会編纂

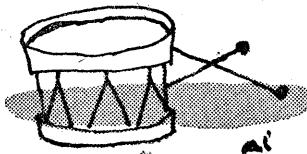
B五判 一二〇頁 領価一五〇円
元 一六円

発売所 株式会社 フレーベル館

(神戸頌栄保育短期大学)

1、城戸幡太郎 幼児の教育 福村書店

幼稚園における問題児とその指導



海 卓 子

(例2)

はにかんでいて、殆ど口を利かなかつた子供を、友だちと協力出来るまでにした例。

幼児名 S、H、(男、昭和二三、一〇、一五、生れ)

指導

丸尾 ふさ

○ 集団生活の当初、問題となつた点。
緊張していく遊べず、名前を呼ばれて返事をするのがやつとで、殆ど口を利かない。家庭では逆に「あはれん坊」になり、今までになく機嫌が悪く、一寸した事にも泣いて始終いらしくしている。

○ 原因と思われる点。

Sは三人兄姉の末子で、兄は小学校一年、姉は年長組に在園している。父母は非常に教育に熱心であるが、一時、母の実家に同居していた事があるので、祖父母に甘やかされたようである。させれば出来ることも大人の手が多いためについしてやってしまい、いつもでも赤ん坊扱いにして庇つて育てたことが原因のように思われる。

○ その扱いと経過について。

(四月～五月)

先づ園に於て、安定した気分で地金を出して遊べるようなキッカケを作ること。

そのためには、一人でもよいから「遊べる仲間」をつくること。始めはともかく不安感をなくすために、教師との接觸を多くし、更に他のSと同様にまだ友だちと遊べない子供たちと一緒にして教師が仲間に入つて遊び、極力何もしないで、ぼんやり見ていたりする時間を少くするようにした。友だちをつくるために、おいしく年長組にいる姉や、姉の仲間からも離すようにして、教師と、友だちへの親しみを増すようにしむけた。又同時にみんなの前で、何でもしっかりとほめるようにして、自信をつけていった。

(六月～七月)

丁度六月の初に新しい園舎に引越し、年長組と分れたのを機会に、姉たちからは離れたが、未だ仲良しは出来ず、教師が中心になつて遊んでやらないと、友だちの遊びを指をくわえてみている。

「お店」「つこ」などをしても、お金を持つて店の前に行くが、「コレチヨウダイ」と云

えず立っている。傍から教師が「下さいな」と云つて買ひ、「Sちゃんはどれを買うの」と誘いをかけると、どうにか指さして買つて来るという始末である。

場面が理解出来るだけに、自分を意識することが強いので、夢中になって遊べるようになると、「狼(う)こ」をして、教師が床を這つて歩いたり、寝転がつたりして馬鹿騒ぎをした。子供たちは部屋中大騒ぎをして逃げまわつていたが、二回目の時、「ホラ狼だ」という声に、小山羊たちは慌てゝ、机の下にかくられ、やがてお母さん山羊が帰つてくると、Sは思わず机の下からとび出して、「ミンナタベラレチャッタヨ」と夢中になつて報告した。これを転機として、「ガリバー」と手をつすると、「コラ、ガリバー」と教師の手にぶら下り、やつと自然な姿が見られ生地を出していくようになつた。

今まで家庭では、不機嫌でやたらに乱暴をしていたが、この頃から、家に帰るや否や、幼稚園での報告をするようになつた。けれどまだ、いたずらや、乱暴は同様であった。集団の中で、自分の思うように遊べるようになれば、家庭での遊びも自ら平常に復し、癪癩

を起すことも少くなると思うから、やたらに吐つたりしないで様子を見るように注意しておいた。

相憎やつと「芽」が出たところで夏休みを迎えることになるたので、家庭には近隣から

来ている同組の男児となるべく多く遊ばせるよう連絡をとつた。

(九月~十月)

夏休み中は親密さを失わぬよう、教師と手紙の交換をしたりして、二学期を迎えた。最初の日はさすがに稍緊張していたが、ともかく「オハヨウ」と自分から云つた。但し多少の後退は避けられなかつた。例えは、「汽車ごっこ」をしているので「のせてもらいましょうよ」と手をとつても、「イヤヤ」と云つて入らなかつたり、又登園をしぶり、「先生が待つていて」と励ますと、漸く家を出るという始末である。

Sは又気が小さくて、一寸した事でもとてこの組は積極的な行動をとる子供が多く、Sの外にも数人、気圧されていて遊べない子供があるので、この五人を保育終了後残して遊はせてみた。M子やK男など今まで殆ど口を利かなかつたのに、「ソウジヲ手伝オウ」とキヤー／＼騒ぎながら、床拭きまで手伝い

人ぼっちになり、泣きそうにしている。「先生入れてね。」「あゝよかつた。ぬれないで」と喜ぶと、やつと安心して涙をふく。Sにはまだこのような個人的な働きかけが必要である。

リズムの時、T子と二人が一番先に覚えたので、皆の前でもう一度させてほめると、嬉しそうにしていたが、其の後二人はいつも一緒に、帰りにはSがT子を傘に入れて新館に帰つた。この二人はこれがキッカケとなつて仲良になり、いつも隣同志に座つたり、肩を組んだり、抱き合つてシーソーをしたりしてあそぶようになつた。この頃家庭でも、やつと姉から離れて、一人で遊べるようになつた。

Sは又気が小さくて、一寸した事でもとてこの組は積極的な行動をとる子供が多く、Sの外にも数人、気圧されていて遊べない子供があるので、この五人を保育終了後残して遊はせてみた。M子やK男など今まで殆ど口を利かなかつたのに、「ソウジヲ手伝オウ」とキヤー／＼騒ぎながら、床拭きまで手伝いSは「早クアソボウヨ」と云い出す。「鬼っこ」や「馳けっこ」をして一時間ばかり遊んだが、帰りには「モウ帰ル」とみんなつ

「入レテイツテアゲル」と云えない中に、一

まらなそうであった。次回は五人の外に、S

“と誘つたり出来るようになつた。

と同グループの積極的なメンバー三人を加えてみた。前回と同じく、三人の子供に気圧されることはなく、よく遊び、その中でT男やS男（積極的なメンバー）との交渉もかなりあつた。この頃になって漸く、一人でどこへでも遊びに行き、以前のような乱暴や、不機嫌はなくなつて來た。

（十一月以降）

或朝、Sは登園するなり、ノツカマエルゾーと部屋に居た十人位の子供を追いかけ始めた。皆は今までのSと全然違うので、面白半分“Sちゃん、Sちゃん”と手をたたいて逃げまわつた。これはSにとって、対等の力関係で大勢のものと交渉を持つたわけではなかつたが、—Sに対する多少みそつかず的興味で相手にされた—このことがキッカケとなつて、自分から今まで遊んだことのない子供の仲間に入つて遊ぶようになり、交友関係が広くなつた。同時に“キシャツクルンダヨ”“ココハオザシキダカラ靴ヌイテ上ルンデスヨ”

運動会で徒競走に二等をとつたのが、非常嬉しかつたらしく、又自信もついたようである。十人位の仲間で一つのポイントになつて遊ぶようになつたのも、これから間もなくあつた。男の子と自由に遊べるようになつたらT子のことはいつの間にか忘れてしまつたようである。

二月の修了式の時には、数人の仲間とステークの上に立つて、修了児に大きな声で独りづゝお祝の言葉を送り、その真剣な態度に思わず涙ぐんだものである。

（例3）

自意識が強く、ひねくれていた子供を、安定した気持で友だちと遊べるようにした例。

幼児名 M、K（女、昭和二三、四、五、生）

指導 伊井 澄子

○ 集団生活に於て、問題となつた点。

自意識が強く、思われ振な態度をとつて、仲間から外れてしまつことが多い。例えば、

などと、大きな声で呼びかけて人に指図をしたり、“オイKちゃん、オニワデ遊ボウゼ

○ 原因と思われる点。

Mは長女で下に妹弟各々一人がある。父は理髪職で他に勤務し、いつも幼稚園の送り迎えをする程、子供を可愛がつてゐる。母は勝

氣で、「お隣のBちゃんが出来るのだから、あなたに出来ないことはない」と云つて、Mを激励する。一つには勤人の多い地域に居住職人であることに強い劣等感を持ち、“負けるものか”という頑張りの姿もある。親の劣等感がそのまま子供にも影響して、能力が普通以上であるにもかゝわらず、前記のような行動をとるものと思われる。

○ その取扱いと経過について。

すねた時には知らん顔をすること。その反面、彼女の良さを、他の子供たちにも認めさせて、理由のない劣等感を除き、正しい認め方によつて、彼女の「認められたい気持」に満足感を与えること。これを指導のねらいと

Aチャンガ、私ガ何モシナインブツタリ

いつて泣き、これをキツカケに列に入らずすねて並ぼうとしない。周囲の者がなだめてもきき入れず、三、四十分ぐずつてゐる。

して、先づ、Mのためによい友だちを選んでみた。Mを頭から見下すような坊ちやん型を避け、非常によく気がついて、積極的に動き然も庶民的な感じのするT男を相手とした。

或日、M子は箱庭用の半坪程の箱の中に入つて遊んでいた。T男が通りかゝつて、「舟ネ

舟ニシヨウ」 M子はまめくしく中にござを敷き、T男は簾を竿に見立てゝ、舟を漕ぎはじめた。M子の競争相手であるK子、O子が通りかゝつて、「入レテ」という。T男は「ウン、イイヨ」とうなづく。M子はこれに誘われて、「靴ハココニスグノネ」と機嫌がよい。「オ父サンハ一寸山ニ行ツテ来マス」

M子「イッティラッシャイ」「ミンナ、ココカラ上ツテネ」とお母さん気取りで指図をする。このようにして、いつもなら一度や二度は泣くのに、T男とのコンビではよい女房役をつとめる。M子「マタシタモシヨウネ」と、このような遊びが毎日続き、見ちがえる

ようになつて、いつもなら一度や二度は泣くのに、T男とのコンビではよい女房役をつとめる。M子「マタシタモシヨウネ」と、このような遊びが毎日続き、見ちがえる

M子「イッティラッシャイ」「ミンナ、ココカラ上ツテネ」とお母さん気取りで指図をする。このようにして、いつもなら一度や二度

は泣くのに、T男とのコンビではよい女房役をつとめる。M子「マタシタモシヨウネ」と、このような遊びが毎日続き、見ちがえる

ようになつて、いつもなら一度や二度は泣くのに、T男とのコンビではよい女房役をつとめる。M子「マタシタモシヨウネ」と、このような遊びが毎日続き、見ちがえる

（例4）
自己顯示が強く、あそびをませつかえして
いた子供を、よいリーダーにした例。

○ 幼児名 K、N、（男、昭和二三、四、一
四、生）

この後で雨具を届けながら、保育室を覗いたことがあつたが、いつもならば、M子だめ

でしょう」と口出しをするのに、黙つて覗いて、後で教師に雨具を渡していく。

このチャレンジをとらえて、M子の弱点である「云いつけ口」「いぢわる」をみんなの問題として取上げて話し合つた。

M子は自分より弱い相手に対しては、安心

感からか、非常に親切にするので、この事をみんなの前でほめて、特定の相手に対しても「いぢわる」を封じた。

絵画、工作等はなく巧いので、これも自信をつける手懸りとした。

M子の場合は、親の問題が大きいと思われる所以で、一日母に保育の実際を観てもらつた。この時、同時に数人の母に来てもらったが、M子の母親が劣等感を持たないよう、それに子供に問題があり、然も素直で、素朴な母親を選んだ。この数人の仲間では、M子が能力的に勝っているので、一応安心した

ものか、教師の忠告を素直にきき、自分の子供に対する過大の要求が、却つて子供を害していることを、現場でよく観たようであつた。

ではいけないことがわかつたようである。最近の記事に「今までには近所の子供と遊ばせずに、良い家のお子さんと遊ばせていたがお話を伺つて、やっぱり近所のお子さんも大事だと思い、みんなと遊ばせました。M子が嬉しそうに指図をして遊び、玩具も今まで貸しませんでしたが、出してやつたらみんなで綺麗に片附けました」とある。

最近問題の「泣きおどし」は余りみられない。親の要求水準が高すぎると云う事は、子供を往往にして卑屈にしてしまう原因となつてゐることが有る様である。

が多い。

特に統率力があり、能力も高いので、Kの影響は非常に大きく、稀にKが欠席すると組全体の動きが異り、それ／＼の子供が落付いて遊んでいる。

○ 原因と思われる点。

Kは妹一人で、Kが生れる前に長男が死亡している。このためにKに対する両親の期待は大きく、母は細心の注意をKの上に注ぎ、このため知らず／＼甘やかしている。家庭に於けるKは生活の中心であり、従つて性質は

○ その扱いと経過について

(一学期) 集団のまとまりが弱い時——一学期などでは、乱暴をされても、それに対して抗議をすることは出来ず、精々教師に云いつけに来るのが精一杯であった。このような時期には、抗議をするようにしむけながらも、教師がそれを直接解決してやらねばならず、従つて個別的な指導が多くなった。友だちとの交渉が深くなり、集団意識が芽生えてくるに従つて

Kの起した問題は、一人の子供にとってだけの問題ではなく、仲間にとっての問題となってきた。

(二学期～三学期)

砂場で数人が山を作っていたら、Kが突然これを壊した。それに対して「ダメダメ」切角作ッタノニ」と秩序を乱すものの抗議は活潑になつたが、それでも問題は教師に持ち込まれ「先生、Kチヤンガイケナイノ」と訴えられた。このようになるべく子供たちに批判させて答を出すように仕向けていた。

それにも拘らず、Kによる同様の被害は度重り、Kへの追随者も現れて、その場の調子にのつて雷動的に問題を起す子供も出て、Kを中心とした勢力は増大した。

教師は積極的に遊びに参加し、Kが横暴に振舞つた時には、一応注意し、それでも我儘を返そそうとする時には仲間から除外した。同時に、リーダーシップのとれるよいリーダーをそぞて、彼を中心とした遊びのグループを拡大することにつとめ、「今日のあそびは面白かったか？」何故面白かったのであろうか？」と質問し、自分の云い分文を主張する

ものがいると、面白く遊べないことをわからせていった。

こうして三学期には、組の中心的メンバーはKから離れ、Kの行動に対する批判も強く腕力でかなわない時には、集団でKに対抗する傾向も現れて来た。

一方、K得意とする大工作業をやらせたり、腕力が必要な時には特にKを起用して、全体の中でKの役立つ場を作り、その能力を他の子供にも認めさせて満足を与えた。

(年長組の一学期)

年長組になると、組の編成替えによつて多少顔ぶれも変り、K自身もツベルクリン検査の結果、陽転したので欠席となり、休み明けの時などは、他人の遊びを傍観していることもあつた。とは云え、問題は度々繰返されていた。

(年長組の二学期)

年長組になると月に一、二回「相談会」を開き、自分たちの行動を反省させていくが、この時にKはランボウシタリ、ケンカシタリシナイトと云つた。教師はすかさず「Kはよいことに気がついた。これはみんなの約束にしよう」といつて「みんなのや

くそく」とした。

二学期の半頃、Kは友だちを棒でなぐたが、その時、周りにいた者が、みんなでKをやつつけようとしたので、Kは門の外に逃げ出した。教師が呼びに行くと、「ミンナトアイタクナイ」という。「どうして?」「ミンナノヤクソクヤブッタカラ」といった。

「みんなのやくそく」殊に自分の発言で定つたことは、こんなにも強く響くものかと、指導の一つの方向が得られた思いであった。

数日の後、朝の集合の時にKはSと喧嘩をし、それは大したことでもなかつたが、みんなの普段Kに対する不満が爆発してKに向つた。

Sも同様に批判されたが、いつの間にかSの周囲には女児が取用んでSを慰め、Kは集中攻撃にあつた。Kは尙も強気に「コッペパンカッテコイ」などとふざけてこまかうそとうしたが、多勢に押えられ、みんなでKを廊下に連れ出してしまつた。他の子供たちが整列してから、「Kをどうするか?」について話合ふと、「手ヲシバッテ、納屋ニイレル」「木ニイワエツケル」等という発言があつたが、「そうしたらKはよくなるだろうか?」と反

問すると、みんな黙つてしまつた。「今までのように、まちがつたら注意してあげる」ということにした。

Kは今までになく大勢の子供たちから仲間外れにされ、特に一番仲良しのYが先頭に立つて自分をやつつけたということは、非常に大きなショックとなつた。

この日の帰り際に、リーダー(二学期から始め、数人のグループから一人を組全体で選んで、組のリーダーとし、組の責任者とする)の選挙があつたが、いつもならば数票は入るのに、今日は一票も入らなかつた。いつも票が少いと「僕リーダーニナンカナリタクナイ」とやせ我慢をいうKも、今日は首を垂れて何も云わなかつた。

Kはこの事件後とて慎重で、稀に乱暴をしてもすぐに謝り、作業などの時も積極的にやろうとする。「センセイ、僕コノゴロ、イデショウウ」というので「こういうKが続けたからえらい」はげます。このような態度が二週間以上も続き、他の子供が「オ母サン、Kチャンハオトナシクナツタヨ」と報告する程であつた。

十一月初めには遂にリーダーに選ばれて、

晴々しい表情で、みんなの前に立つた。

こうして、Kにより妨害をされ、集団のまとまりが崩されたようであるが、結果的にみれば、Kがいた事によって却つて皆が一致団結して之に当り、集団のまとまりを強めた結果となつた。

六、結び。

以上簡単ながら問題児を、幼稚園生活という集団場面でどう指導したらよいかという問題に重点をおいて記述した。

問題児の指導に当つて重要なことは、何を問題とするかということであろう。即ち問題とは教師が教育の上で大切だと考えている問題

これから外れているものが問題であり、時には教師の考え方による問題があつて、好みやうとする。「センセイ、僕コノゴロ、イデショウウ」というので「こういうKが続けあやまちもある。従つて、問題児とする場合には、はたして之がどういう意味で問題となるかをよく吟味せねばなるまい。こゝに例示出来なかつたが、一応集団生活についているが、自覺のない行動、まわりの動きのまゝに、人の云いなり次第に動いてい

る子供を「問題児」として重視したいと思う。よいにしろ、わるいにしろ、浮草のようになつて、はつきり方向づけられたりするときと同様に、否更にそれにもまして注意を要するものと思われる。

問題となる行動は、その子供にそなわっているものばかりではなく、その子供を囲む周囲の条件によって引起されているものであつて、周囲の条件が変れば、行動 자체に変化のある事は、指導事例を見れば明である。例えば事例4のKの行動の変化は、Kと組の子供との力のバランスがとれた時に、著しい。従つて、問題児の問題は、教師の指導によつて問題児と集団が好ましい噛み合せをした時に解消するものと思われる。こゝに集団を対象として指導する意味があるといつても、その子供の、その集団の成育状態によつて、或時期には、個人指導に重点をおく事も云うまでもないことである。

更に細い事を附加すれば、集団の中で一人の子供に発表させたり、一人の子供を批判させたりする時には、必ず成功の見とおしを持つて行わねばならない。みんなの前で発表してうまく出来なければ、却つて自信よりも劣る子供を「問題児」として重視したいと思う。

等感を強めることとなり、批判によつて萎縮してしまえば、更に、問題をこじらせることがになる。

葉にも投葉の時期と分量があるように、指導にも、適切な時期と適量の刺戟とがある。やりなおしのきかない人間が対象である。丈にささやかな経験をも生かして次の試みの指針としたいと希うものである。

(白金幼稚園)

28頁より 予定の時刻に帰園した。しかし何よりも嬉しく感銘したのはこども達の行動であった。休憩所へあがるのに靴を組毎にキチと揃えた。室内でも組毎にまるく坐つて、小さな膝の前におそろいのカバンとその上に帽子が重ねられてある。そして持つて来たおやつをハンカチの上にならべて、どれから先に食べようかと品定めしている無心なこどもの姿をそこに見たのである。

この話はこれで終るが、帰りのバスの中で、半ば眠りこけながらも膝の上に載せたおもいの袋を、しっかりと小さな両手で抱いていた可愛いい姿を、今でも思い出すのである。

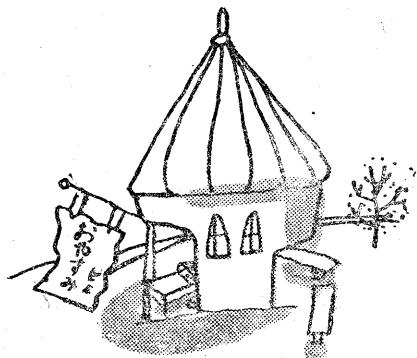
(台東区立柳北小学校)

いくのとは大違ひなのである。掘つたみずみずしい自分の脚ほどあるのを先生こんなに大きいのがといぢいら見せに來るのである。持つて来た手拭で作つた袋に一ぱいつめるとは見むきもしない。みんな並んで手を洗うとお弁当を食べる。たべたあとは紙屑どころじやない、御飯粒まで一つ一つ拾つてきれいに片づけるのである。こうしたことはこどもだけの集団であるからこそできるのだと思う。自主的に行動する場を与えたことがこうした立派な行為となつてあらわれたのである。

帰つてから、迎えに出ていた父兄にこのことを報告したら涙をうかべてきいている親もあつた。

この話はこれで終るが、帰りのバスの中で、半ば眠りこけながらも膝の上に載せたおもいの袋を、しっかりと小さな両手で抱いていた可愛いい姿を、今でも思い出すのである。

(台東区立柳北小学校)



新入児を迎えるため の環境設定と心の準備

北村 次子

新しい子供を迎えるよろこびは、何年のないでしようか。

経験を経ても同じ事で。そして、毎年新しく入って来る子供達と、全く違った子供達が今年も多勢入って来ると云う感激は、何年たつても同じ様な緊張感となって感じさせられます。

新しい子供も、大きな希望と、より大きな不安を抱いて幼稚園の門をくぐるに違いません。親にうながされて、無理につくる笑顔を、その瞬間に自然にほころびる笑顔に変えて行きたいものです。

「環境設定と心の準備」非常に重要な事で、なめらかな語として聞き、出来た様なつもりになり、そしてなんてむずかしいのだろうと何時も思うのがこのことばです。

新しい児一人一人に住み心地のよい幼稚園

- 誰もが心から楽しく遊べる友達と、心からふれ会う事の出来る先生。
- どの家庭とも連絡のとれた仲のよい幼稚園は突然としたつかみ方をしましたが、子供にふれて、子供と遊んでいる私共にはこんな事が感じられるのでは

◎ 住み心地のよい幼稚園

あの子も、この子も、同じ場所に遊んでいながら、一人一人に行きとどいた心がまえがしてあれば子供は、安定感をもつて遊びことが出来るでしょう、同じ材料を持ちながら、どの子もが、自分の持っている力を充分に伸す様になるでしょう。

勿論、これは園全体の設備が、その園なりに充分活用されていなければなりません。

健康新明るさ、清潔な雰囲気、保育室にも園庭にも一つ一つの遊具にも便所にも心がけられなければならないと思います。清潔にすることが強調されると、冷たさを伴うことがあります。暖かい清潔さと言う言葉を使って考えてみたいと思うのです。

保育室の窓ガラスは、何時でも太陽の光が通る様にみがかれているでしょうか、うすぐらい廊下にも花をかざり、古くなつた椅子までが何か新しく、なる感じがする保育室を想像して見ることが出来たら迎えら

れる子供は幸せでしょう。

遊具のあり場所、種類ももう一度調べて見ましょう。頭の内にある状態では満足出来ません。去年一年間無事だったからと云う事では、マンネリズムな新鮮みのない幼稚園を仕立てて行くようになると思います。

「あぶないかららぬこと」等、札を立てる前に、あぶなくないあそび場所、物にしておかなければなりません。

無駄な釘、積木のさくくれ、少しかけたまゝごと用具等、つまらぬ小さな事も気をつけたいと思います。

庭のすみが物置の役目をして、古材をつんだりしている所があつたらきんなどです。庭は遊べる庭として活用出来る様に考えなおしましょう。せまい庭を有意義に活用するには、遊具の位置と、行動の範囲を細かい位までに考えなければなりません。

便所はどうでしょうか、便所が一人で完全に使用出来る様になれば社会生活と同時に、集団内の一人の行動も出来たと云う

事になるのです。始めは先生と一緒に行っていた子供が一日も早く、一人でそつと行かれる様な所にしたいのです。一人で行こうと思つた便所が、うすぐらかたり、臭気がこもつてたり、きたなかつたりしたら、一步前進しようとする発達をさまたげる事にもなるのです。

手洗いの場所も、何時もビシャくした感じたり、したら、指先だけで終つてしまふ様な手洗いをする様になるでしょう。

よい習慣をつけるには、よい習慣のつく様な、施設設備がしてなければならないと思うのです。

この他、下駄箱のあり方、帽子かけの様子、そして急救箱の使い方、応急な手あての方法もう一度考えなおしてみましょう。

◎ 友達と先生

先生は、子供達にとつて母親と同じ様につきまといたい存在であることは、母親からなれた子供にとって当然のことです。便所はどうでしょうか、便所が一人で完全に使用出来る様になれば社会生活と同時に、集団内の一人の行動も出来たと云う

迎えられる時、四角四面な挨拶のみに終わず、「きれいなほっぺたね」とか「元気だ」とか「赤い靴ね」お世辞ではなく、心から一人一人の子供に接したら、子供はどんなによろこび安心するでしょう。

どの子にも親しめて、自分の組だけに集中しないこともこんな場合には大切な事だと思います。

幼稚園の仕事を何年経験したから自信が持てたなどと云うことはないと私は思います。

先生の自信は、どんな場合にも傍観せずによつかり、自分が行動すること、反省すること更に前進することによって自らつくり上げて行くものだと信じています。牛の様なたゆまぬ努力と、鹿の様な敏しょうさをほしいものだと思うのです。

一日で全部の子供を知つた……楽しく遊んで終つた……子供と先生のふれ合いはこんなあさい物ではないと私は思います。

ひざっこをすりむいた時、マーキロをつけてもらつて、先生がしつかりつかんで下さつたひざっこを感じながら、本当に先生にすがつた気持になれるのではないでしょ

うか、となりのあいた椅子に、先生がこしあけて皆と遊んだ時、そのとなりの子は先生と直接なつながりを持つかも知れません。どんな時に、どんな場がひろげられるかわかりません。先生はどんなところにもそつと眼をくばつておきたいと思うのです。

あの子とあの子は同じ色のセーターで、

友達になりました。この子はけんかをした次の日に親しそうに話していました。そつと寄つていって手をつないでうれしそうにしています。子供同志のつながりも、『皆な仲よくするんですよ』と云うまでもなく一つ一つの瞬間にひろげられて行く様です。

玩具、遊具の数と幼児の数は、子供に協同生活の楽しさを味合せることにも、いがみ合う事にもなるのです。多すぎて無駄な事は必要ありません。誰もがそつと何かに手を出せる様に用意しておきたいと思います。

狭い庭にも小さな花壇を工夫し、とり小屋等も考えてみましよう。狭いからくと

云ついたら何も出来ません。狭くて活動出来ないのなら、広い所へ行つて遊ぶ計画を立てればいいのです。たつた二羽のにわとりの卵をためて、級ごとにいたゞくことが出来たら、たとえ、四分の一でもどんなに鳥を大切にし、やさしい気持を持つ事が出来るでしょう。

◎ 家庭と幼稚園

「どうも、幼稚園は……」ともし子供の一番好きなお母さんの口から、無意識に幼稚園や先生の批判が出たら、次の日から子供は何をたよりに幼稚園に行くのでしょうかが、幼稚園に入園した子供と同時に、家庭と幼稚園が一つの方向に進む事をお互に話し合わなければならないと思うのです。家の教育方針に合わないからと云つたら子供こそ可愛想です。

×
×
×
×

環境準備も心がまえも何もかもがまとまりなく出て来てしまいました。

子供は生きて動いています。先生も足ぶみをしてはいられません、今日も新しい空氣の中で思う存分、子供と一緒に遊べる先生でありたいと思います。ゆきとどいた目ざしで子供の一人一人をみつめられる先生でありたいと思います。

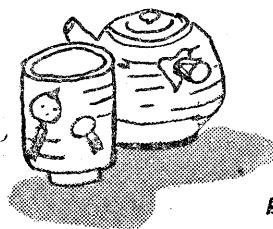
た色合せと、無駄のない活用を心がけましょう。額の位置や内容、大きすぎる黒板を半分やわらかい色でおよつたカーテン、花びんの花、卒業して行く子供達や、年長組のお友達が、心からたのしんでかざった装飾、これで充分です。

暖かい清潔さを、心静かに思い浮べて見たいものです。新しい子供に接する準備、そして教師一人一人の心がまえ、いらしくしていたり、教師同志が協力出来なかつたり、細かくは、自分の髪が乱れていたりしない様に、心やすらかな笑顔が、明日迎える子供にみせられる様にしておきたいのです。

◎ 入園の日

明日は入園の日、とお互に心まちにしています。先生の展覧会の様な迎え方、アーチを立て五色のテープをかざり、こうしたあああしたらと、こりにこつた装飾、これらも先生の気持でしょう。けれども、落付い

『この頃の私の幼稚園』



Ai

佐 藤 実

私の幼稚園の子供達は、五千坪の遊園地に野兎のように嬉々として生活している。自由ブランコ、腰掛ブランコ、遊動長ブランコ。シーソー乗り、舟のメリーゴーランド木馬のメリーゴーランド。電気機関車の豆汽車等に乗っている者。回数を数えて順番を待つ者。孔雀や鳩、家鶴、鶯鳥、小鳥に見とれている者。小猿、大猿に興する者。子鹿に

餌を与えていた者。兎やモルモットに野菜をやっている者。音楽堂で「お歌をうたつたりお遊戯をしたり劇」こそこそをやっている者。三十メートルのすべり台から軽快に滑っている者。砂場で山や川を造つたり。ケーキを作つて喜んでいる者。あずき屋に腰を下して、眼下に開ける仙台市の全貌や、遙かに泉ヶ嶽の秀峰を望み、藏王の雄姿に心引かれる者。青草に寝転んで「つぼすみれ」を描む者。蝶の後を探集網で追いかける者。崖の綱につかまつてターザンゴッコ、ゴジラゴッコをしている者。墓塚を青草の上に敷いて、ままごと遊びに余念のない子等。涼台で数人集つて絵本を見て話している者。豆汽車の踏切番をする者。仙石線の電車の通過に万歳を叫ぶ者。電車や動物や植物園の花を写生している者、等々。老杉の聳立している間に四季の草木が節々の葉や花の色彩を換え、蝶、蛙、かたつむり、蟬こおろぎ、とんぼ等は子供達のよい友となるてくれる。冬は雪合戦、雪鬼作りそろ遊び等山坂、平地を利用して楽しい生活をしてい。る。市街地に住みながら、この様に、自然に伸びている子等は私の園児一四六名である。



クリスマス仲よし会・劇「サンタのおじちゃん」

園児と園長の共演（新しい趣向でバツクに飾りつけたところ。
もみの木を使わない）

餌を与えていた者。兎やモルモットに野菜をやっている者。音楽堂で「お歌をうたつたりお遊戯をしたり劇」こそこそをやっている者。三十メートルのすべり台から軽快に滑っている者。砂場で山や川を造つたり。ケーキを作つて喜んでいる者。あずき屋に腰を下して、眼下に開ける仙台市の全貌や、遙かに泉ヶ嶽の秀峰を望み、藏王の雄姿に心引かれる者。青草に寝転んで「つぼすみれ」を描む者。蝶の後を探集網で追いかける者。崖の綱につかまつてターザンゴッコ、ゴジラゴッコをしている者。墓塚を青草の上に敷いて、ままごと遊びに余念のない子等。涼台で数人集つて絵本を見て話している者。豆汽車の踏切番をする者。仙石線の電車の通過に万歳を叫ぶ者。電車や動物や植物園の花を写生している者、等々。老杉の聳立している間に四季の草木が節々の葉や花の色彩を換え、蝶、蛙、かたつむり、蟬こおろぎ、とんぼ等は子供達のよい友となるてくれる。冬は雪合戦、雪鬼作りそろ遊び等山坂、平地を利用して楽しい生活をしてい。る。市街地に住みながら、この様に、自然に伸びている子等は私の園児一四六名である。

大自然を日々生活に取り入れる子等は幸であると信ずる。

私は子供が大好きである。童心そのままゴジラゴッコのゴジラにならたり、青草に寝転んで童話や紙芝居に子供と共に楽しい生活をしている。五千坪の園地の周囲には金網の柵があつて外部からの危険を防いでいる。先生方の採用条件の第一は「子供好き」で健康体であることである。従つて当園の先生

五名は、明朗且つ童心そのものである。
看護にそつた無いことは勿論で安全教育第一主義をモットーとして学級經營に当つているのである。

顕微鏡をのぞく子

「さあ皆さんのお手々をくらべてこしましようね」と、担任の先生が、万年筆型のボケット顕微鏡を取り出すと、「僕の手を見せて下さいね」。「私の手、バイキンついていいかなあ」等言いながら先生の前に一列に並び自分の手を眺めている。

「あつ僕の指、黒いバイキンついている」。

「私の爪こんなにきれいよ、ね、先生」。

「そう、道子ちゃんのお手々はきれいね、おりこうね」と賞めて頂くと嬉々として皆を呼んで来ては、手洗いのお世話ををする。

水道のカラランから流れる水は半開きの栓から、つましやかに次々と子等の手を清潔にしてくれる。娘は身近かな処にあるので理論でなく実践そのものである。

「手を洗いなさい」「汚いことをしてはいけません」と言う愚劣さを演じないで、手を洗うべきことが理解され、水道栓を半開きにし

て適度な水の流れを利用することを身につける経済観念の素地を作ることにもなる。

「蝶々のはねのこな、きれいだよ。」「チューリップの花のこな（おしべ）卵のよだよ」と、小型顕微鏡からのぞいては、大発見に眼を輝して、先生に或は友達に、或は家庭でも話し合うという子供達は幼い科学者の姿である。

私の考案に成る仙台市地図に当園の位置に小さな孔があつて、簡単なスイッチを押すと立てかけたその板の裏から豆電燈がつく。又

立てかけた板に美しい絵が貼つてあってその隅に呼鈴が取付けた。簡易なスイッチを押すと可愛らしく鳴り出す。

入園早々の、四月の始め遊園地のおじさんからひよこを二羽ずつ貰つた。園児の誰もが二三日でひよこの墓を作つてやつたと報告してきたが健ちゃんと幸三ちゃんは、みかん箱

子供達は長短、断続、自由に玩具として遊びながら電燈、電話等の原理を自ら学んでいる。一、五Vの乾電池の+、-がわかる。或る子供は故障を発見してお互に試している。完全に電燈がつき、呼鈴が鳴つた時の喜ぶ様は誠に晴々した空の太陽を仰ぐ感じがある。

日常生活がもつと科学的にならなければ何れだ。

幼い科学者には情操と科学とに何等矛盾が

科学は身辺にあるので、ガラス槽に金魚や鯉や蛙やかたつむり、こおろぎ等を飼い、鉢に草花を植え、継続觀察している子も居る。雑草に寝転んで、花摘み、お細工、絵を描くこともする。崖から岩を掘り彫刻したり、美しい石ころを、ちり紙に包んで大事に家に持ち帰つて、菓子折箱の空箱に蒐集する者も多い。

無いのである。

樂書する子

參觀人のある度に私は「私の幼稚園の何處でもよいから落書を探してごらん下さい。一つ百円の懸賞を付けましょ」と戯談乍ら自慢するのである。子供には落書でなく、樂書させることである。常に黒板にチョークで樂書自由である。鳥の子全紙大の衝立画板六面には泥絵具又は水彩絵具で樂書している。各自は自由帳を持つて鉛筆やクレパスで自由表現している。或者は花を、自動車を、人物を、風景を、或者は自分の氏名を、友達の名を、家族の名を筆順や配列等かまわざ気の向くまま樂書している。落書を禁止する前にしている。

子供は友達同志でよく喧嘩をする。そのくせ仲直りも案外早い。

入園当時は子供同志で喧嘩がしばしば起

る。その時は「おや相撲やつてゐるね。どつちも負けるなよ。ああ此廻は危いから草原がいいね。それとも砂場かな。皆、丸くなつて座りようね」と、安全な場所を選んで、私が行事となつて相撲とりをさせると、もう子供は喧嘩でなくなる。僕も僕もと次々に可愛い関取りが出て来る。盛んな応援に精一ぱい力競べをする。その結果、組の誰さんが強い。その次は誰、その次は僕だ。等と話し合つてもう横綱から幕下まで決ると喧嘩が無くなる。正々堂々の相撲で体力の順位がきまり、上を越すと努力する。消極的な弱虫には私が投げられて負けてやることもあつて、笑いの中に喧嘩をしなくなる。意地悪をしないといふ名実共に仲よし幼稚園となるのである。

便所の履物は行く時、直ぐ履けるような向きに並べて帰りにぬぐことにしている。時に乱雑な履物を整頓する子が多くなった。

智恵子ちゃんは家族の履物をきちんと揃えてや、板屏、腰板、ガラス窓に悪戯の落書をしないものである。

書くべきところに書き、描き、書くべからざるところに書かない躰をつけて置けば便所

や、板屏、腰板、ガラス窓に悪戯の落書をし

ないものである。

子供は友達同志でよく喧嘩をする。そのく

せ仲直りも案外早い。

出入りの客までが感化され波及することは嬉しい。

園児のこうした躰の実践が家族の躰となり

ます。

ともすると躰を強要する傾きがあるが私は

童謡、童話紙芝居、幻灯、ペーパーサート、人形劇等を通して、幼児の人格を尊重し、話し合いで決め、約束したことは必ず実行する責任を持たせることにしている。それで先生方には「しなさい」という命令と、「やめなさい」という禁止の言葉を使わないことにしている。

「こうしたらどうなるの。こうした方がよいと思うが○○ちゃんはどう思うの。こうこうしましようね」とか、「それはあぶない遊びではないの。こんなことはわるい遊びでないの。そんな遊びはよい遊びかなあ。だから、こんなあぶない遊び、わるい遊びはもうしませんね」とか、子供の要求や行動について結果はこうなるからこうすればよいのだと、子供なりによく納得させて躰をしているので、正しい道徳的判断の芽生えが伸びて來るのである。昼食時の挨拶は歌につれて手洗い弁当の用意、次に「お父さんお母さん、いただきます」と身近かな両親への感謝を捧げるのです。

小学校入学前に躰けて置くべきことが多々ある。

あるのを見逃してはならない。

口と目と耳のよい子

子供には自由に届けなく話させるようにしているが、仙台弁といつて地方訛や方言が多いので、ことば遊びをしながら興味を持たせて矯正している。室内拡声装置が設備されてるので、或時はマイクから子供達に話しかけさせることでマイクを通すと明瞭に誤りが発見されるので矯正し易い。まことに遊びの挨拶や会話を言葉の指導に重要である。クリスマス仲よし会の劇を十時のレコードに吹込んで採って、後で子供達に聽かせ矯正指導や鑑賞用にと試みて好成績を収めた。テープコーダーの活用もよいと思う。

物をよく見る習慣は幼児期から植えつけるべきである。それには幼児心理を考慮に入れて注意の持続時間とか興味とか、色形、動き等を研究して取扱うべきである。
「今日は月曜日だから紙芝居があるね」と私の紙芝居を待っている。私は只一巻を取扱うのであるが、伴奏は音楽の先生がしてくれる時々、観ている子供等から自然に歌が流れてくれるそれは紙芝居を見ているのであるが絵紙

や説明に融け込んで感情移入の境地になって指導精神を心の中に受け入れているのである。幻灯機の設備利用については毎月の行事記録の写真のスライドを作成して反省資料にしているが天然色スライドに自己の姿を発見した時の子供の喜びは又と無い。ハミリ撮影機（米国製キーストン）による記録又は劇映画を映写機から映写幕に映写するのも同様で私の製作である。（私は映写技士の免許証を持つていて）行事毎の写真帳も貴重な資料であるし、月刊雑誌や絵本、漫画、童話の本等毎月購入しているが、子供等は見古しの絵本や雑誌を持寄つて学級文庫を作り物をよく見る習慣がついている。

朝には子供等の知つている童謡や音楽のコードをかけラウドスピーカーから流れるリズム、メロディに合せて山の上、森の中、草原、園舎の中から子供達の合唱する明るい声がこだまする。チャイムの五音が柔かな韻律を漂すと、手を洗い集合の心構えをする。振鈴が鳴り響くと、小栗鼠や野兎のように集合して、朝の挨拶、今日のホールーム、仲よし体操、行進と、すべて音楽に始まり、音楽に終る園の生活である。

開園第一に子供のために設備したもの一つに、ドラム、ケース、トライアングル、タンボリン、ハンドカスター、リングベル、木琴、笛、ラッパ等々のリズム楽器があり仲よしバンドは行事の人気者の第一である。

音楽や歌をよく聴き、よく歌いよく踊るリズムの生活は、幼児の根本要素である。この訓練された子供こそ、人の話もよく聞き入れ自分の正しい意見を表明し得るよい人となるのである。

「お日々はぱつちり、お耳をあけて、お話上手なよい子供」

物をよく見、何事につけても、よく聞き、充分理解したところで、自由に正しく話す態度を形成する序幕は何と言つても幼児期にあると思う。「この子はうるさいね。のぞいたりして、おしゃべりで。大人の話等聞いて」と等と叱つては、尊い芽生えが縮んでしまうことがある。

雨や風の日には、「雨にもまげず、風にもまげず、強い子、よい子」と、朝の集会に力強く斉唱し、雪の日は、「雪にもまげず」と

強い子よい子

雨や風の日には、「雨にもまげず、風にもまげず、強い子、よい子」と、朝の集会に力強く斉唱し、雪の日は、「雪にもまげず」と

一句加えて元気に遊び、お稽古に励むのである。

やがて成人して、詩を読む時期になり、宮沢賢治先生の詩を理解するであろうことを思えば、子供達の将来に光明の輝くことを信じて止まない。

カリキュラムは進展して止まないが季節と遊びと行事と学習とを織りなして実施している。毎月の行事生活に山を持たせ、身長、体重測定と並行して、遊びや学習、心の伸びの観察評価をしている。

行事としては、四月に、桜の名所榴ヶ岡公園の地続きにある当園では、「花まつり仲よし会」を催し、世界の偉人歓迎の降誕を祝賀して新入園児歓迎の会としている。五月に鯉のぼりを立て、鯉のぼり仲よし会体育会を催し、松島に遠足、七月は海水浴、九月は仲よし運動会で家庭の皆様と楽しい一日を過し、お明月仲よし会には園児の祖父母を招待して敬老の意を表し、孫の教育に対して意見の交換をし幼児教育の正しい在り方を把握して頂く、十月は秋の遠足で温泉を選び保健衛生とし会で当園の東隣の天満宮に参拝し千歳飴と

守符を全児に配り前途を祝う、十二月はクリスマス仲よし会、のみの木のかわりに愛林思想普及をかねて背景を描きそれに飾り付けた。新趣向にアメリカンスクール幼稚園児も喜んで交歓会を楽しく過した。一月は新年仲よし会で、かるたとり、みかんとり等、室内ゲームに花を咲かせる。二月は豆まき仲よし会で入園志願の子供達と豆まきや遊びをし当園理解の第一課とする。三月はひなまつり仲よし会で当園独得の私のデザインになるこげびなを飾つて祝う。卒園式並びに修了式には、よい子賞と強い子賞とを頂いて子供は一年の園の生活を終えるのである。

この諸行事には、お父さんお母さんの会、「仲よし幼稚園清交会。」が設けてあって清交会から一人当毎月二十円宛の贈物がある。清交会は各級から委員六名宛選出し委員中から委員長、会計、庶務を選出して、自主的に運営していく和やかな強力な後援会である。

(仙台仲よし幼稚園)

▽ 教育実際指導研究会 ▽

六月の教育実際指導研究会の期日が左のように決りました。

六月 九日 (木)
六月 十日 (金)

六月十一日 (土)

右お知らせ致します。

昭和三十年四月

お茶の水女子大附属幼稚園内

幼児教育研究会

特別の寄附は絶対頂かない。ピアノも、電蓄も、拡声装置も、幻灯機、映写機、撮影機も想普及をかねて背景を描きそれに飾り付けた。新趣向にアメリカンスクール幼稚園児も喜んで交歓会を楽しく過した。一月は新年仲よし会で、かるたとり、みかんとり等、室内ゲームに花を咲かせる。二月は豆まき仲よし会で入園志願の子供達と豆まきや遊びをし当園理解の第一課とする。三月はひなまつり仲よし会で当園独得の私のデザインになるこげびなを飾つて祝う。卒園式並びに修了式には、よい子賞と強い子賞とを頂いて子供は一年の園の生活を終えるのである。

この諸行事には、お父さんお母さんの会、「仲よし幼稚園清交会。」が設けてあって清交会から一人当毎月二十円宛の贈物がある。清交会は各級から委員六名宛選出し委員中から委員長、会計、庶務を選出して、自主的に運営していく和やかな強力な後援会である。

毎学期当園発行「清交」誌は、子供の育て方行事、美談、諸報告を満載し、家庭から喜ばれています。

日々もすれば何処の学校でも幼稚園でも、寄附を要求し保護者を困らせていくが、私は

特別の寄附は絶対頂かない。ピアノも、電蓄も、拡声装置も、幻灯機、映写機、撮影機も想普及をかねて背景を描きそれに飾り付けた。新趣向にアメリカンスクール幼稚園児も喜んで交歓会を楽しく過した。一月は新年仲よし会で、かるたとり、みかんとり等、室内ゲームに花を咲かせる。二月は豆まき仲よし会で入園志願の子供達と豆まきや遊びをし当園理解の第一課とする。三月はひなまつり仲よし会で当園独得の私のデザインになるこげびなを飾つて祝う。卒園式並びに修了式には、よい子賞と強い子賞とを頂いて子供は一年の園の生活を終えるのである。

この諸行事には、お父さんお母さんの会、「仲よし幼稚園清交会。」が設けてあって清交会から一人当毎月二十円宛の贈物がある。清交会は各級から委員六名宛選出し委員中から委員長、会計、庶務を選出して、自主的に運営していく和やかな強力な後援会である。

毎学期当園発行「清交」誌は、子供の育て方行事、美談、諸報告を満載し、家庭から喜ばれています。

日々もすれば何処の学校でも幼稚園でも、寄附を要求し保護者を困らせていくが、私は

特別の寄附は絶対頂かない。ピアノも、電蓄も、拡声装置も、幻灯機、映写機、撮影機も想普及をかねて背景を描きそれに飾り付けた。新趣向にアメリカンスクール幼稚園児も喜んで交歓会を楽しく過した。一月は新年仲よし会で、かるたとり、みかんとり等、室内ゲームに花を咲かせる。二月は豆まき仲よし会で入園志願の子供達と豆まきや遊びをし当園理解の第一課とする。三月はひなまつり仲よし会で当園独得の私のデザインになるこげびなを飾つて祝う。卒園式並びに修了式には、よい子賞と強い子賞とを頂いて子供は一年の園の生活を終えるのである。

この諸行事には、お父さんお母さんの会、「仲よし幼稚園清交会。」が設けてあって清交会から一人当毎月二十円宛の贈物がある。清交会は各級から委員六名宛選出し委員中から委員長、会計、庶務を選出して、自主的に運営していく和やかな強力な後援会である。

毎学期当園発行「清交」誌は、子供の育て方行事、美談、諸報告を満載し、家庭から喜ばれています。

日々もすれば何処の学校でも幼稚園でも、寄附を要求し保護者を困らせていくが、私は

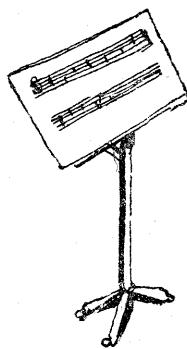
特別の寄附は絶対頂かない。ピアノも、電蓄も、拡声装置も、幻灯機、映写機、撮影機も想普及をかねて背景を描きそれに飾り付けた。新趣向にアメリカンスクール幼稚園児も喜んで交歓会を楽しく過した。一月は新年仲よし会で、かるたとり、みかんとり等、室内ゲームに花を咲かせる。二月は豆まき仲よし会で入園志願の子供達と豆まきや遊びをし当園理解の第一課とする。三月はひなまつり仲よし会で当園独得の私のデザインになるこげびなを飾つて祝う。卒園式並びに修了式には、よい子賞と強い子賞とを頂いて子供は一年の園の生活を終えるのである。

この諸行事には、お父さんお母さんの会、「仲よし幼稚園清交会。」が設けてあって清交会から一人当毎月二十円宛の贈物がある。清交会は各級から委員六名宛選出し委員中から委員長、会計、庶務を選出して、自主的に運営していく和やかな強力な後援会である。

毎学期当園発行「清交」誌は、子供の育て方行事、美談、諸報告を満載し、家庭から喜ばれています。

日々もすれば何処の学校でも幼稚園でも、寄附を要求し保護者を困らせていくが、私は

兼任園長覚書(児童をとりまく環境について)



菊田

要

ところは浅草、といつてもいちばん日本橋に近い問屋街、店の主人は年少の頃から苦労して今日を築いた旦那衆、それだけこの校舎である。

三十六教室のうち、小学校が三十四教室幼稚園は二教室——衝立で三つに区切る——と一小室とを使用している。小学校は義務だから学区域は無条件入学、幼稚園は近くの小学校に併設していないから、応募者は二倍から三倍に達する。しかも学区域は別

に定っていないから、区内居住なら誰でも受付けなければならない。小学校は四十二人の職員に対し幼稚園は五人、それも三十才以下の女の先生ばかり、毎年三月頃になると新入学童が増加のため、義務教育でない幼稚園は廃止したらという、至極こもつともな意見も出ようという状態にある。

さてそうした条件のもとで小学校長兼幼稚園長の果す役割はかなりむずかしいものになってくる。公立の性格を堅持しながら運営していくには、いろいろな抵抗に堪えていかなければならない。

まず入園の公正を期することである。選考については、区内十二園が園長会の決定に基づいて全く同じやり方であるからいくぶん気が楽であるが、実際の問題にぶつかると困難なことが沢山てくる。もともといたいかな幼稚園にテストしたり抽せんさせたりすることが、どうかと思われるが、どう考へてもこのほかに方法がない。いよいよ決定してはされた子に泣き出されたりすると全く憂うつになってしまふ。それも平常P・T・Aの会合などで顔などみになつてお母さんが、憂愁につつまれて傍に立つておられでもすると、全く身の細る思いがする。

つぎは幼児教育の確立である。そんなことあたりまえといわれるかもしれないが、まだまだ旧い観念がのこっている。父兄には忙しい店の仕事の邪魔にならないよう幼稚園に入れるという托児所風の考え方があるし、先生もお嬢さん仕事として嫁入前になつてくる。公立の性格を堅持しながら運営していくには、いろいろな抵抗に堪えていかなければならない。大学へ

も通じる一環の教育にむすびつく幼稚園教育でなければならない。幼児時代に培い伸びなければあとで取かえしのつかぬこともある。旧い観念から脱皮して幼児教育を大道に載せなければならない。毎日の保育が行きあたりばつたりではならぬし、カリキュラムもうち建てなければならない。

その同じ建物内にあるだけ特に小学校との連絡を十分にとつて摩擦相剋のないようにならなければならぬし、むしろ進んで幼稚園と小学校の関連については具体的に研究を進める必要がある。

その上大切なことは、P・T・Aの総力を結集して十分に援助して呉れる体制を整えなければならない。それには前述の幼児教育本来のものを理解してもらい。お互に有機的に結びあってこそ強い支援が得られる。またそのために幼稚園教育の実績も挙げなければならなくなる。その実績を挙げるには、先生がのびのびと気持よく打込んで仕事ができる場を構成しなければならない堂々めぐりらしくなるが、それは兼任園長の責任がまことに重且つ大にな

つてくる。名儀上本務である小学校を立派に經營していくと同時に、幼稚園もうまく運営していくとなくてはならない。この各々独立した二つを調和させていくことが第一の条件であり、なかなか困難な仕事である。

とはいっても、幼稚園の廊下へ一步踏み入れば、喚声をあげて可愛いおつかば頭が腰のまわりにぶらさがると、唯もう愉しく嬉しくなってしまう。この間も歳末こども会の折、お母さん達と共に演でパライエティをやつて、お猿のかごやから落ちて尻餅をつくところを力演したら、あくる日園長先生は怪我をしなかつたかしらと心配して話し合っていたとのことである。

そういう純真無垢で感じ易いこども達に對して、できるだけいい環境を作りあげてやりたいものだと思う。部屋を清潔にして綺麗に飾ることも大切だが、園全体をとりまく明かるくのびのびと自由な雰囲気こそ大切であろう。いつか見たNモデル幼稚園の建物が、色彩、形、採光等に十二分に気が配つてあるにかかわらず、肝心の建物全

体の感じがいかにももろいお粗末な感じはどうかと思つた。重厚さとか健実な心を養うには設備不完全でもまだうちの方がいいなあと思った。ぜいたくといわれるかも知れないが、色彩、形のほかに質というのも忘れてはならないことである。しかも建物の裏手へまわつたら階段の手すりのパイプがグラグラしていて、よく見るとコンクリートの固めがいい加減で工事者の非良心的な腹が立つた。体裁が多少悪くも幼児の生活場所だからガツチリと造るべきである。一年もたたぬうちにこんなことでは何だか立派に見える建物全体にもこうした不完全さがところどころに散在しているのではないかとさえ感じられて不安に思つた。それから後にお茶の水女子大附属幼稚園を見て、旧式であり少し暗いが全体が落ちついていて重厚な感じは好ましく思つた。近代的な明かるさは人が作つて補つていけばよいだろう。京都の明倫幼稚園も旧い形式だが古都らしいしつとりとした落ち着きが感じられた。そんなことをいうのも、結局幼いこどもほど直観的に身体で素直に

感じていくのであるから、その環境設定については慎重に十分考えていかなくてはならないということなのである。

あんまり色彩や形にばかりこつて、安手な薄っぺらな感じも困るし、さりとて重厚な感じでも暗くてじめじめしていけるようでも困る。感じ易いこどもに与える精神的な影響を考えて、良い環境を与えてやりたいのだ。どうせ幼児だからという考え方をして、幼児だからこそなお重大に考えなければならないのだという観点に立つことが大切である。

もちろんそこで當まれる職員とこどもとの精神的な生活が幼稚園の生活であろう。いいわるい評価も建物や設備のみに対してもなく、本当はこの精神的なものに対してもある。朝、ニコニコしてこども達が登園してくるようでなければならぬし、先生もニコニコと迎えて一日中楽しく過せるような幼稚園であることが理想でなければならぬ。ここまでかくとどうやら自分の首をしめるような結果になってしまった。兼任とは

いえ園全体の責任者として果す役割は量よりも質的に大変なことだと思う。

こどもが環境によって思いがけないほどしっかりした行動をとるものであることにについては次の例を挙げよう。

昨年の秋、都下K村にある芸大農場へ園外保育を実施したときのこと。思い切って新らしい試みをして見た。

一、附添は一切つかないこと
(この費用三十円也)

二、おやつは全部同じものを用意する。

まず父兄の代表者会議を開いてこの企画について詳細を説明した。一の理由として親がついて来るとその引力の方が強い親の方も甘やかすからまるで○○家と××家の合同遠足になってしまい、園児としての集団的取あつかいがまるでできなくて、先生はその間に立つてまるで旅行家のようにあちこちと、走りまわり文字通り奔命に渡る。それに教育にはその場をつくることが大切で、集団の訓練は集団の中においてこそできるのである、自主的な生活対応

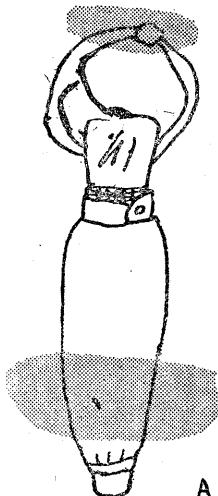
の訓練をするためにこの計画に協力願いたいと述べた。二の方は、おやつをどうも持たせ過ぎる傾向があるし、お互に見栄をはつていいものを競うことにもなるし、誰もが同じ物を持つていくことはそれを救うことになる。母の会の人たちに選択して貢つて袋につめて用意しておけば各家庭でも手数がはぶけるというものである。何しろ始めてのことだから、最初は不安がつていたお母さん方もどうやら了解して実施の段どりとなつた。

ところが折も折、その申込みを受付けている最中に突然したのが相模湖事件であった。これは父兄に大きな衝撃を与えたに違ひなかつた。職員会議でいろいろ話し合つた結果、それだからといって毎年遠足はやつているのだし、しかも教育効果の多い行事を止めるまでに、消極的になる必要はあるまいという結論で断乎実行したのである。

当日は約九割の参加者であった。天候に恵まれたし、事故一つ起らなかつたしす

子供の間に作られる歌について

その蒐集を願いたい



Ai

久留島 武彦

のクウリクリツ！
クリクリと呼びはじ
めた時、双の腕をわが

胸の前で、二三遍ぐる
ようと輪にまわして、
最後のクリツという言
葉の時に、石、紙はさ
みの何れかを出してそ
れで勝負がきまるとな
るのです。

いも及ばぬ創作の面白さ、私は心から驚かさ
れて、これを耳にした時は、一寸言葉も出せ
ないほどがありました。

戯の中に取り入れ、映画俳優のチャップリンをジ
ャンケンポンの離子ことばに活用し、チャップ
リンから其の特色のあるドタ靴に言葉がとび
り込んできた。その靴を買ひに店に入つたら、値段があまり
高かつたので、びっくりして眼玉をクルクル
と引くりかえしたと想像ははとんで、其の眼玉
の回転をわが遊びの運動に引つけ、両腕を回
してクリクリのクリツときめ手を出すまで、
何という大胆、何という自由、誠に無難作には
こびをつけて、大きいいえば天衣無縫の働き
ともすれば理屈にとらわれる大人にて到底思
ります。

一例をここにあげて見ると、
「セッセッセ！ある日チャップリンが靴買
いに、あまりたかいので、お目々がクリクリ

近頃子供の運動場での遊びに、ジャン・ケ
ン・ポンの昔からのかけ言葉が、全く變つて
シユツシユツシユツまたはセツセツセと云わ
れて居ることは知つて居つたが、私が驚いた
のはそのかけ言葉や、動作の相違よりも、こ
れに縁もゆかりもない文句が伴い、それと共に
に動作までが變つて來て居るという事実であ
ります。

私が斯く願うのは、ここに幼児の言語活動
の大切な基礎となるリズム運動が働いて居る
ように思われるからであります。

彼等には言葉よりも響きであります、其のものつリズムであります。言葉は約束されたものの符牒でありますから、そのままでは融通性はないのですが、その言葉を組立てる声の響きは、変通自在で、何等の拘束されるとこ

ろはない。

そこに子供の働く自由性というか、飛躍的応用性と云いますか、其のひびきから引かれて、変通自在、チャップリンの靴の購買からジャンケンポンの遊びにまで自由自在に活用されるのであります。

更にこういうのもあります。これは京阪方面の幼稚園から採集したものであることは、其の唄の中に含まれた環境、景物、言葉でもおわかりになるでしょう。

無論これは「お手々つないで——」の唱歌が原話である事は無論ですが如何に子供の環境と体験と、その飛躍的活用によって、自由大胆に、そして如何にも滑稽な結果にまで引落され居るかに驚かされないものはありません。

「お手々てんぶら喰べすぎて、あちゃこ先

生に見てもらい、（あちゃこは関西の漫才

ないです。

師である事は申すまでもなし）坊やもうあかん、発疹チラスの出来損い、腫れたお膿に蠅となる。おうコチヨバイ、コチヨバイ——」

というのです。

此のお手々つないでの唱歌は、永くひろく各地に拡がり、尤も普遍的な児童唱歌であつただけに、此のつくりかえは京阪のみならず私が中国津山市で某女学校の生徒さんより、その幼時、好んで皆でうたつた覚えがあるといふので報告を受けたのは、文意にも、材料にも一層自由奔放、生活環境のさまざまな姿を表現して居る事を見のがすわけに行かないのです。

それが為に、そんな唄がうたわれて居るかも知らないで過されたることが多いのですが、私は、実は此の変えられたる歌の研究ほど、彼等の情意のうごきと、言語活動の基本となる筋路を調査するのに大きな役割をもつて居るものはないではなかろうかと、そんな事を思うのであります。

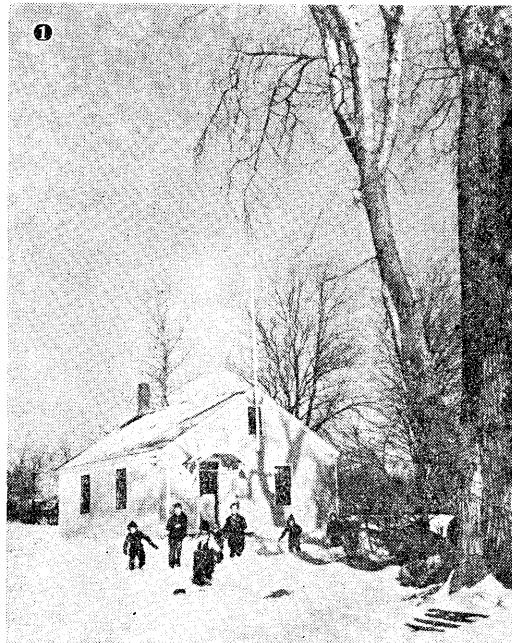
あまりに長くなりましたが、此の項は此のくらいで止めて、他日更に私は、声の響きと言語の関係について、各位の指導を仰ぎたいためあります。各幼稚園、保育所の方々にお願い申したい事は、御園の子供達の間で、変えられて唄われている歌を耳にされたら、今まで御投寄下さる御好意を願上たいのです。

「お手々てんぶら喰べすぎて、あちゃこ先

（宛先 京都市智恩院黒門内児童芸術研究所）

子供たちが家に帰るまで

アメリカ大使館文化交換局提供



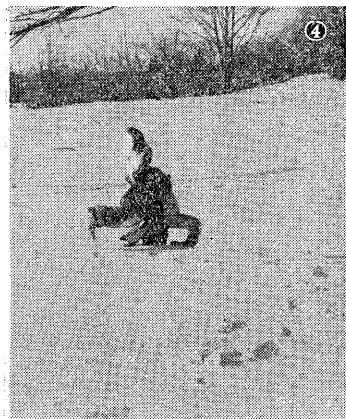
① 先生から、道草をくわざに真直にうちに帰りなさいと云われて、学校をとび出してゆく。これは米国の田舎の典型的な学校である。

② 白樺の生えた自動車道路沿いに、何が珍らしいものはないかと歩いてゆく

此処に掲げる数枚の写真は、一人の五才の男の子が、或る冬の日に学校から家に帰る途中の冒険の数々を捉えたものである。此の子供の住む所は、米国のメイン州北東部にあるロツクヴィルという小さな村で、彼はそこに住む人をよく知つてゐる。学校から家までは約三糠あるが、途中で方々に寄り道して帰るので、延べ五糠はたっぷり歩いている。撮影者は、此の子供を見失わないように追いかけまわすのに、くたくたになってしまった。



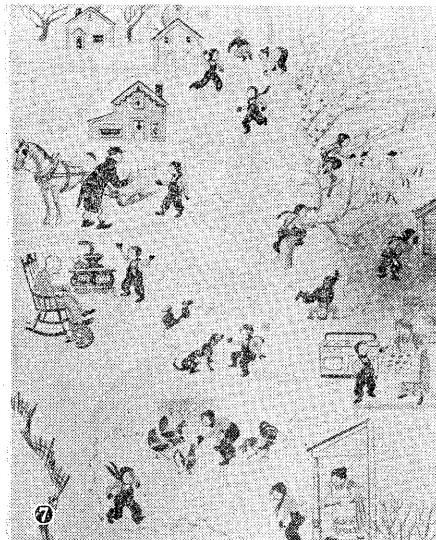
③ 近所の犬と戯れボケットからとり出した
「宝物」に夢中になる。



④ 雪の野原の中を走りまわって、でんぐりがえしをする。いろんなものが、逆さまに見えるぞ

⑤ 羊の群が、乾草のまわりにたむろしている。
柵に上って眺めると、よく見える。

⑦ 学校から家まで、あちこちよりみちして帰る五糸の道筋を示してある。



⑥ 家に帰って来た、母親が迎えに出て、簞で雪を払い落してやる。

日本の保育理論といえども、二にもべ、スタロツチ、フレーベルを掲げるか、心理学的基礎に基るいはせい教育學的基礎に基いた技術論を理論と考えてしまうかのほかほとんど考えられることがなかつたといつても過言ではな。その中でほそぼそながら、もと広い視野、歴史的社會的背景に根ざしながら、しつかり現代の問題をとらえ、幼児をその中で育てようという意慾をもつた流れがたしかにあつた。だがその流れは前進的ではあるが、大抵の場合時代の問題に押され、歴史全体の鳥瞰の上に立つて方向を見定めるゆとりをながらくもちえなかつたこともたしかである。

高橋さやか著『家庭と保育の歴史』代の問題に押され、歴史全体の鳥瞰の上に立つて方向を見定めるゆとりをながらくもちえなかつたことは、もとたしかである。高橋さやかのこの書は「保育的社會疏隔に不満を感じ、それにとその方法」とならんでこのような方向がはじめて結んだ実だといつてよからう。たしかにこれは私の限りにおいて私も大いに共鳴すじめて結んだ実である。だからともかく、見通しをつけようとし、根本的にはこのよな抵抗に身をなからうか。その典型的な例が家

意慾をもち、体系ももととしておいていることがこの本の強さと弱さを作つているのであると私を直接形而上学的思弁や、素朴な実証的心理学的知識に基づいて討の不足がある（例えばオベール史の令嬢というだけで個人的にはしまわず、歴史と社會の發展のもランについて）。しかしとにかくことはいなめないであろう。つまり保育という社會的現象のことはいなめないであろう。つまり保育史の事実についてはいくつかの誤りなしし資料検査をマカレンコでさえそれほど抽象的に考えてはいない。

度の軽親、集團保育の崇拜という点に見られる。この点については一度の割期的意味をもつた本であることとはたしかで、むしろこの本との対決や、これを具体化するところから私たちの新しい建設がはじめられなければならない。

▲書評▼

高橋
さやか
著

家庭と保育の歴史

高崎毅

（阿佐ヶ谷東教会牧師）

一つの課題としてとりあつづつている

□ 知らない。しかし察するところ、

□ 点である。

□ フレーべリアニズムに育てられ、

□ だからこの本は教育史における

×

×

□ 産業革命の正しい意味をとらえているし、幼稚園成立の社會史的意義を見出している人であるらしい。その歴史觀は結局において一種の形而上

□ の限りにおいて私も大いに共鳴す

□ ものをもたないではない。だが

□ 学に終つてゐるきらいがないでは

×

×

幼稚園教育要領（案）とその問題

《第2回》

宮

内

孝

二、現在までの経過

1・作成の動機

幼稚園教育の要領編集委員会がはじめて開かれたのは、昭和二十六年五月三十日である。従つて、文部省で幼稚園教育要領を作成しようという意図をもつたのは、ついぶん前からのことであるといえる。（註1）

では、なぜ幼稚園教育要領を作成しようとしたのであるか。幼稚園教育の要領編集委員会に示された作成要領に「幼稚園がその教育の目的や目標を達成するために、児童をどのように理解し、その教育の内容をどのように選んで児童を指導していくたらよいか等について研究するための手びきとしてつくる」とあるとおり、「幼稚園の教師および園長ならびに指導主事のために」幼稚園教育の手びき書をつくるということであった。そして、この書の法令との位置づけとして「既に刊行された保育要領にかわるものとする」となしたのである。

では、なぜ保育要領を改訂する必要があつたであろうか。その根

本的な理由として、情勢の変化を擧げることができよう。敗戦による米国の占領、その占領下においてわが国の教育制度が大きく改変された。そして、その教育的具体的方向は、教育基本法、学校教育法、昭和二十三年の学習指導要領によつて決定された。けれども、これは、当時の学習指導要領を見ればわかるとおり、それが、新しい教育の大綱を示し、教育のあるべき姿の大筋を示したものではあつたが、火急の間に合せ的なものであり、体系と組織性を欠き、新しい教育の行き方を示すに急なるあまり、それを過大に強調すぎたうらみがあつた。余談ではあるが、このために、わが国の教育、とくに初等教育に行きすぎとこれにともなう混乱を引きおこす結果になつたのは周知の通りである。教育の中央集権は崩され、学習指導要領は一つの試案として、単なる基準、方向を指示するものであるにもかかわらず、教育指導の現場にあつては、具体的特殊的事情を考慮することなく無批判に受け入れられ、或は、所謂、新教育の名にげんわくされて、地域社会の伝統・慣習・文化等を全く無視した、木に竹をついだような教育指導が流行したのであった。教育の中央集権は、制度的にはなくなつても、人々の意識には依然として

根強く存在しておった事実、敗戦の混乱の中にその方向を失い、新しい何ものかをもさくしておった現場としては無理からぬことではあつた。

その後、社会が落着きをとりもどして行くのと軌を一にして、文部省——といつても、実権はC・I・E（民間情報教育部）にあつたので、実質的にはC・I・Eといった方が適切ではあるが——でもつきつきと学習指導要領各科編や各種の指導書を作成し或は改訂して、教育指導の正道にたちもどる努力がなされて來た。そして、米軍の占領も終りに近づき日本国の独立も遠くないめあてもできたので、学習指導要領一般編を改訂し、それに基いて各科編を改訂することになった。学習指導要領一般編（小学校から高等学校までのものである）が改訂されることになったので、幼稚園の方もそれに追隨して保育要領を改訂することになったと解せられる。即ち、学習指導要領一般編は昭和二十六年七月十日に發行され、幼稚園教育の要領の編集委員会の第一回の会合は同年の五月末であるからである。

があげられておる事実、しかも、この第一条に幼稚園が入ったというのは、倉橋惣三先生をはじめ当時の関係者の何週間にもわたる不眠不休の献身的な努力の賜であつたのである。

次に、米国C・I・Eの幼稚園担当官フェアーナン氏（Helen Heffernan）が立派な教育者であり、当時の日本の幼稚園教育の実状をよく理解し、適切な政策をたてられたということである。フェアーナン氏、倉橋惣三先生、当時の文部省青少年教育課長坂元彦太郎氏、同幼稚園教育担当官中谷千蔵氏等、立派な幼児教育者、幼児教育の理解者によつて、戦後のわが国幼稚園教育は甚しい混乱もなく、しつかりした基礎の上に立つて新しく再出発し、今日の隆盛の基点が植えつけられたのであつた。

その他、日本の幼稚園教育は直接国家の統制を受けず、その発達も地域社会の必要により自然に行われたこと、その教育内容や指導法も割一的でなく巾をもち、比較的の自由であったこと、幼稚園の数も、幼児の員数も少く、しかもその大半は私立であったこと等、いろいろの理由があげられよう。（註2）

このような諸理由のもとに、具体的には学校教育法（昭和二十二年三月三十一日法律第二十六号）幼稚園の規定（特に同法第七十八条の幼稚園の目的、目標）や保育要領によつて、戦後のわが国の幼稚園教育は、幼児のような歩調ではあるけれどもその方向をあやまることなく出発したのである。

保育要領は、前記のフェアーナン氏の指導のもとに倉橋先生、坂元氏、中谷氏をはじめ委員の方々の努力によつて出来上った指導書である。簡にして要を得、平易で美しい文章をもつて保育全般に

幼稚園の教育指導は、終戦後小学校に比べるならば、それほど甚しい変革はなかつた。

その理由としてはいろいろの点が考えられるが、米国の政策の重点が義務教育に向けられていたことが最大の理由と考えられる。しかし、その義務教育を中心として、それより上の教育、即ち、中・高・大学に向かはれ、それより下の教育はそれ程に考えられなかつた。そして、この傾向は、ただに米国のみでなく、当時の日本の教育界も同様であった。例えば、学校教育法の第一条の最後に幼稚園

亘つて書かれてあり、今までの幼児保育の指導書としては右に出づるものはないと考えられる立派なものである。（現在、絶版になっていることは甚だ惜しい）

けれども、どのようにすぐれた著作といえども、その時代の制約から離ることはできない。この書の製作された当時と現在とは、時代的に大きなひらきがある。まして、保育要領が保育指導書として幼稚園と保育所と共に適用されるものであり、系統的組織性を欠いておる。従つて、幼稚園の教育課程を編成するにも不便であり、教員養成にしても支障を来すことは明かである。また、小学校との関連もじゅうぶんに考えられていない。文部省で、学習指導要領一般編の改訂を期に、その改訂を計画したのは当然のことと考えられること。

2・委員会

上記のような動機から文部省ではC・I・Eと打合せの結果保育要領の改訂を意図し、C・I・Eのアンブロース女史及びユアーズ氏の指導のもとに編集委員を決定して着手したのである。委員会は、文部省初等教育課長大島文義、文部事務官伊藤忠二、同武田一郎、同玉越三朗同鹿内瑞子、東京都港区立麻布幼稚園長鈴木虎秋、湘南学園長吉下正美、日本女子大学附属幼稚園主事橋高貞、東京都港区立南山幼稚園教諭小山田幾子、千葉大学教育学部附属幼稚園教諭渡辺俊枝、埼玉大学教育学部附属幼稚園教諭友松秀子、雙葉第一小学教諭柴田みどり、静岡県教育委員会指導主事小河洋、東京学芸大学講師角尾稔、千葉大学助教授宮内孝の諸氏をもつて組織し、昭和

二十六年五月から十二月までの期間、約三十回の委員会を開く予定で出発した。

當時、われわれ委員としては、

(1) 要領を編集するということより、この会合によつて自分達の勉強をするという態度でのぞみたい。

(2) 現在の小学校教育をそのまま肯定し、それに歩調を合せるという行き方ではなく、幼稚園から小学校以上の教育を改革して行くという態度でのぞみたい。即ち、小学校との関連において幼稚園教育を考えるけれども、それはどこまでも幼稚園教育の立場に立つて考へること。

(3) 幼児教育という漠然としたものではなく、「学校としての幼稚園」の教育について系統的に組織づけること。

そして、具体的にはこの要領一冊によつて、幼稚園教育全般の基本線がはつきりするようなものにしたいと考えたのであつた。

けれども、いよいよ出発してみると予想以上に難事であることに気づいた。まず、参考書が少いことである。殆んど全くといつてよいくらい新しい計画なので、適當な参考書がない。わざかにC・I・Eから借りることができたが、不備でありじゅうぶんであつた。

次に、時間と費用がないことである。すべて本というものは、研究や調査の結果としてでき上るべきものである。従つて、この要領を作るにしても、(1)参考書を読むこと、(2)研究観察、(3)実験的指導研究の三つは欠くことができない。けれども、委員はそれぞれ本務

をもつており、文部省では委員の交通費さえ支払えない状態であった。しかも、期間が短期間に限られていた。

第三は、C・I・Eの態度である。責任をかいひし、自己の効績を最大にしようとしたのは米国占領軍の共通の態度であった。従つて、C・I・Eにおいても命令は与えずサゼッションを与え、それに実質的には命令と等しい力をもたせるのが常とう手段であった。故に、彼等と仕事をする場合、その与えられたサゼッションが、單なる軽い意味のサゼッションなのか、命令的強い意味のものか判断に苦しむ場合が多いのである。また、文部省は常に彼等のサゼッションをあおいで仕事をしておつたので、仕事が非常にやりにくかった。特に、この委員会は、中心であるアンブロース氏が十一月に引あげる予定なので、会にも殆んど出席しない状態であった。私は、アンブロース氏と仕事をするのは初めてであり、氏がどのような人柄でありどのような考え方を持つておるかわからず、一処に話し合う機会も少なかつたため、その意途がはつきりしないので困つたのである。

第四は、幼稚園教育そのものからくる問題である。例えば、カリキュラムの具体的構成は一年保育、二年保育、三年保育別に作るか。一年保育、二年保育、三年保育という名称が適當かどうか。満三才からの教育、即ち三年保育存廃の問題。「保育」という言葉の廃止の問題。教育(保育)内容の項目の問題等々、委員会で態度を決定する必要のある問題が山積しておつた。

このような理由が主となつて仕事は遅々として進まず、幼稚園教育の要領に盛るべき事項と委員の分担などが決定したのは八月三十日

であった。それからは、各委員が自分の分担について研究し、まずその要項をつくって、委員会にかける。委員会ではそれを修正する。委員会で修正されると構想をやり直してまた提出する。要項がきまとその内容の大筋を書いて委員会にかける。そこでまた、何回も討議し、最後に全文を草し、委員会で討議訂正して終る、という方法であり。書き直すこと十数回にも及んだ委員もあつたし、また、教育課程の具体例ではその形式を委員会で訂正して書き直させ委員会の決定通りの形式で書き直してきたら、それを否定して、以前の形式に逆もどりして書き直すようにしたため、担当委員が怒つてしまつたということもある。けれども、一・二の委員をのぞいては毎回よく出席し和氣あいあいのうちに楽しく話合いをすすめ、自分達でお茶菓子をもちよつたり、会場を整えたりした。毎回よく発言する委員は言語活動の評価+6であるとし、議論をはじめる他の委員が指を六本出すので大笑いになる。宮下委員の広いそして豊かな教養、鈴木委員の温厚中正なものを見方等によつて、各委員は幼稚園教育ばかりではなく広く人間的に成長していく。骨身をけずるような一年有半に及ぶ仕事ではあつたが、やりがいのある楽しい仕事であったと現在から回想されるのは私一人のみでないと思う。

このようにして、最初に予定された期間をはるかにすぎ、赤ちゃんが二人生れ委員の二人が初めておかあさんになつて、昭和二十七年八月末にまがりなりにも一応完成して当局に答申した。その答申の全ぼうは、現在の状態では永久に日の目を見ないと思われるのでここにその当時の要領の項目を参考までにのせることにしよう。

幼稚園教育の要領

(1)指導の方法

(2)具体的指導の方法

2、よりよい指導をするための資料

3、指導結果の評価

VI 指導に適当な環境はどうすべきか

1、教師

2、施設・設備及び教材・教具

(1)望ましい施設・設備及び教材・教具

(2)整備と活用

(3)評価と改善

VII 幼稚園は家庭・小学校及びその他の施設とどう協力したらよいのか

1、幼稚園と家庭との協力

2、幼稚園と小学校との連けい

3、幼稚園と関係施設との協力

(結び)

この項目によつてもわかる通り、幼稚園教育全般にわたるものであり、これを出版したならばA5版四、五百頁になると思われる内容をもつたものであった。

3・文部省

文部省では、初等教育課内で委員会と併行して協議が進められており、その模様は部外者である私にはわからなかつたが、委員会の答申の終つた昭和二十七年の八月頃には、大体幼稚園教育の目標

まえがき

I なぜ幼稚園教育は必要か

1、新しい教育における幼児教育

II 幼稚園教育の必要性

1、教育の一般目標

2、幼稚園教育の目標

(1)幼稚園教育の目標の原理

(2)幼稚園教育の具体的目標

III 幼児の発達について何を知るべきか

(1)幼児期の全般的特性

(2)身体の状況

(3)知的発達

(4)情緒的発達

(5)社会的発達

IV 幼稚園の教育課程はどのように構成するか

1、教育課程の構成に必要な条件

2、教育課程を構成する方法

3、教育課程の具体例

4、教育課程の評価

V 望ましい経験をさせるための指導

1、指導の方法

の項の審をつたらしい。この頃の文部省の意向としては、教育課程までとそれ以後とを分離して、まず、教育課程までを完成して出版する予定であったらしい。当時、幼稚園界に「要領はどうした」「早く発表してほしい」という声が盛んにおこり、文部省でも何とかして早く発表したい気持はあつたらしいが、何としても玉越事務官一人では手薄で何ともしうがなかつたというのが実状であつたらしい。それやこれやではかばかしい伸展を見せないうちに、今度は省内で方針がかわり、幼稚園から高等学校までの教育を見透し初等中等教育について一貫性をもたせようということになつた。

そして、幼稚園から高等学校までの学習指導要領を一冊或は上下二冊程度にまとめようというのである。即ち、今までの学習指導要領一般編に幼稚園をも加え、各学校毎に各教科の要点を加えて改訂し、それだけを学習指導要領として法的根拠をもたせ、今までの各科編は皆指導書の形式にして法的拘束を取り去ることになったのである。

省内の方針の変更、玉越事務官の病氣、初等教育課ぎつての幼稚園通の一人である武田一郎氏の転出等々悪条件がかさなうて、幼稚園教育要領も何時生れ出るともわからぬままに、委員会が発足してから三年有半、仕事を終えてから満二年を経過し、幼稚園界では幼稚園教育要領という言葉を忘れかけた昭和二十九年の九月に至つてその一部発表となつたのである。

では、その間文部省では何をしておつたろうか。はじめのころは旧方針でいてもよく、新方針でいても役立つように、玉越事務官が病軀に鞭うち多忙な事務の余暇をさきながらまとめておつた。

その結果、昭和二十八年七月に一應次のような項目でまとめあげられた。

幼稚園教育要領

第一章 幼稚園教育の重要性

第一節 幼稚園教育の必要

第二章 幼稚園教育の目標

第三章 幼児の発達的特質

第一節 幼児期の子どもの一般的の特質

第二節 身体的発達の特質

第三節 知的発達の特質

第四節 情緒的発達の特質

第五節 社会的発達の特質

第四章 教育課程の構成

第一節 経験内容の系列

第二節 教育日時数

第五章 教育課程の実施

第一節 教育課程構成上の留意点

第二節 年間計画

第三節 月次計画と週計画

第四節 一日の計画

第六章 教育課程の評価

第一節 教育課程の評価の必要

第二節 評価の着眼点

これは、前掲の委員会の要項と比較すれば一見してわかるとおりその答申をもとに、それに補筆訂正を加え整理したものである。その後、新しい方針のもとに、初等教育課内で研究協議が進められた。そして、昭和二十九年一月には指導主事教科別連絡協議会（文部省主催）幼稚教育分科会に、幼稚園の教育目標（案）が発表され、それについての意見が求められた。（註3）³ さて今年八月には全体の草案ができ上り、そのうち、最も重要であり各幼稚園に直接関係の深い部分の中間発表となつたのである。

× × × × ×

註1

「幼稚園教育の要領」「幼稚園教育要領」と二様の名称を使つておるが、これは、最初は幼稚園教育の要領と呼んでおり、後になつて「の」の字を除き幼稚園教育要領となつたのである。従へて、最初のうちは「の」の字をいれるのが正しく、現在は「の」の字をとつて幼稚園教育要領というのが正しう。

49頁より続く

(4) 幼稚園教育養成所の設立、幼稚園連盟によつて設立された養成所の教育は、間接的に博愛・社会事業の訓練であつた。そして児童及び社会に対する道徳的義務が特に強調された。（註4）

註1 Marwedel, E. : Kindergarten in California, In H. Barnard Kindergarten and Child Culture, 1881, p.665～672

註2 昭和二十一年は幼稚園数一、四八〇（国立三三、公立六五八私立七八九）、幼児数一九七、五六九（国立二、五四一、公立九五、六三一、私立九九、三九七）であった。参考までに昭和二十八年五月の統計を示すと、幼稚園数三、四一一（国立三二公立一、二八八、私立二、一〇一）、幼児数五一八、九一九

（国立三、〇四七、公立二一〇、五八四、私立三〇五、二八八）である。（いずれも文部省調査）

註3

指導主事協議会で発表された幼稚園の教育目標やその時の会議の模様は『昭和二十八年度指導主事教科別連絡協議会幼稚教育分科会記録』（文部省初等中等教育局発行）や『幼児の教育』第五三卷第四号参照。

（千葉大学教育学部）

註4 Wiggins, Kate Douglas : The Relation of Kindergarten to Social Reform, In K. D. Wiggins, Children's Rights, 1898, p. 107～138

註5 Vandewalker, N.C. : The kindergarten in America-in Education, 1908

記帳

雜記

ミト井村

日頃の保育で、こうしたいと思うこと、こうなれば願う事は色々ある。あり過ぎる位ある中の一つがこの雑記帳である。そしてこの雑記帳が一回でも多く手にすることが、私の願である。

四十人の受持の子供は四十種の性格を持つてゐる。その子供達をいかによく観察し、その子供なりの指導がされなければならないかという事はいつも考えさせられる事である。或人はこう言うかもしない。しかし私は雑記帳を愛用している。

雑記帳——と聞いただけでも何だか雰然とした感を受けるに違いない。しかし私は雑記帳を愛用している。

毎日と共に過す子供達について何でも気の付いた事をメモしておきたいと思う事を、そのまま記しておきたいと思う事を、その子供の頁にメモしておくのである。

毎日と共に過す子供達について何でも気の付いた事をメモしておきたいと思う事を、その子供の頁にメモしておくのである。

いて感ずる印象は大体は合つていい。記録には色々の方法があると思ふ。ただ私のものかも知れない。良いにつけ悪いにつけ、特種な子供ははつきり頭に浮ぶが、その他の多くの子供は曖昧なのである。毎日を一緒に過していればその子供についてのや、場所を区切つてするもの、環境を限定して整えておくもの等、他にも色々あつたと思う。しかし四十人の子供を一人で持ち乍ら出来るよい方法はなかなかない。折角いい方法だと思っても長続きしないものもある。短時間にして試みつてはいる。先生であり、事務員であり、小使であるので時間がとてても足りない。時間が足りないからと言って部屋の掃除を適当にしておこうと思つても、明日又あの子供達が床の上に座り込んで積木に余念のない姿を想うとこれもい加減には済まされなくなる。だから時間を使つて余程心掛けないと出来ない。特に私の様な意志の弱い者には一苦心がいる。

りした事をその子供の頁に書くのであるが、貢がどんどん埋まつて行く子供もあるし、一向に埋まらない子供もある。一向に埋まらない子供を、一日よく気をつけて観る様にしている。

又、言語なら言語をテーマにきて書き込んでいく。又、言語というテーマをきめても、それを更に小さくとる事が長続きの出来る秘訣ではないかと思う。或日は幼児語について、或日は人の前での発表はどうか、人の話を聞く事はどうか。一つの団体遊びをしても理解力はどうかという様に小さい一つを取り上げて全体を観て、書く必要のある子供についてだけ書く。そうでないと重荷になつて結局つづかない。

主として一日の保育を終つてつけるのであるが、保育室の片隅の

机上に小さい伝票を置き、一寸の暇に走り書きしておく事もある。

しか書くだけでは何にもならない。これを活用しなくてはならない。それも大勢は一度に出来ないので、一日の保育の中にその子

供についての指導を一段と頭に置いてする様にしている。そしてそこで出てきた問題の原因を考えてみると。先日も面白く思つたことであつたが——。いつでもお帰りの支度のおそい子供がいる。皆がオーバーを着終る頃、やつと支度を始める位。どうしてかと思つて特にその日はその子供の行動を注意してみると、人のおせつかいが原因している事がわかつておかしくなりたりする。マフラーが見えな

させる事に気を配つていたが、適切な指導でなかつたわけである。これは一例であるが、よく氣を付けて見ないところが不適当な指導が案外多くころがつているので、一日の保育の中にその子供についての指導を一段と頭に置いてする様にしている。そしてそこで出てきた問題の原因を考えてみると。先日も面白く思つたことであつたが——。いつでもお帰りの支度のおそい子供がいる。皆がオーバーを着終る頃、やつと支度を始める位。どうしてかと思つて特にその日はその子供の行動を注意してみると、人のおせつかいが原因している事がわかつておかしくなりたりする。マフラーが見えない。帽子がない、等という友達が

自分の子供の心身の発育は大体はわかっているつもりでもこの雑記がなかつたら大変である。こんな頭

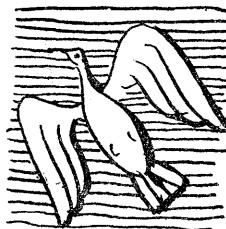
に走り書きしておく事もある。しか書くだけでは何にもならない。これを活用しなくてはならない。それも大勢は一度に出来ないので、一日の保育の中にその子供についての指導を一段と頭に置いてする様にしている。そしてそこで出てきた問題の原因を考えてみると。先日も面白く思つたことであつたが——。いつでもお帰りの支度のおそい子供がいる。皆がオーバーを着終る頃、やつと支度を始める位。どうしてかと思つて特にその日はその子供の行動を注意してみると、人のおせつかいが原因している事がわかつておかしくなりたりする。マフラーが見えない。帽子がない、等という友達がいる。つい先頃誕生を迎えたが一年の雑記を折々拡げてみると育つた一年の変化が面白い。赤坊なので始めるというわけである。今迄はいつも一番びりなので、動作がつかない。

家庭では吾が子の雑記帳がある。つい先頃誕生を迎えたが一年の雑記を折々拡げてみると育つた一年の変化が面白い。赤坊なので始めるというわけである。今迄はいつも一番びりなので、動作がつかない。

そうして今迄は三才なり四才なりとして、幼稚園で受けとつていた子供達に対する理解と希望を、自分の子供の経験を通して更に深めていきたいと願つてゐる。

育 に お け る 話

童



上 沢 謙 二

ところで、人間は生きている以上、必ず何等かの経験をします。経験なしに生きるなどということはありません。だから、生きていくことが自然一種の社会化になるのです。それだけでは充分とはいません。殊に「教育としての社会化」となると、漫然と自然のままに放置しておくことは許されません。それでは教育になりません。殊に幼児は社会性が乏しいので、この方面が重大になつてくるわけです。保育の一つの中軸がそこにあるというのも、こういう理由からであります。

◆ 突き当るギャップ

社会化が経験によるならば、たびたびさまざまな経験をするということが必要で、教育としては、できるだけ経験を豊かにしてやることこれが考えられねばなりません。

「社会化」ということは、おたがい幼児教育にたずさわるもの、寸時も忘れてならないことはいうまでもありません。このためには、できるだけの研究、施設、考慮、工夫、努力がなされねばならないこと、これまたいふまでもありません。すなわち「社会化」は保育の一つの目標とも、目的ともいえましょう。毎日の保育は、これを一つの中軸として

◆ 教育としての社会化

「社会化」ということは、説明や、勧告や命令では、実現されません。つまり、いくら口をすっぱくして、くりかえしていくてもだめなのです。「社会化」は口で教えられるものではないのです。

それを実現させるものはただ一つ——経験。経験は、まず接觸する世界の広さによつて決定されます。接觸の広いものほど、より多く、より豊かに得られます。それから、注意力理解力の深さによつて決定されます。いくらくさんな事柄に接しても、自分の能力が

低いため、注意をひかず、理解ができないならば、接触しないと同じことで、何も得られません。

ところで、この点から観ると、最も頻繁に最も豊富な経験を与えるなければならない幼児は、最もそれができにくい状態にあることを発見するでしょう。

第一、幼児は接触する世界が甚だ狭いのです。大体わが家の内外、近所、幼稚園か保育所へ通つていれば、その環境が加わるといふくらいなところです。どこへでもどんどんゆけるほどの気力も体力も、まだそなつていらないからです。第二に、注意力も理解力も、甚だ弱く浅いのです。そういう心のはたらきが、まだ充分発達していないからです。

だから、いくら幼児にいろいろな経験をさせようとしても、どこへでも連れてゆくことはできませんし、いくらさまざまなものに接

しさせても、自分の理解度に合わなければ受けつけません。強いてそうさせようとすれば疲れか飽きるかするだけで、かえって弊害を生ずることになるでしょう。

一方、できるだけ与えなければならないの

に、他方、ほんのわずかしか与えられない——これは、真剣に熱心に幼児教育を考えるものが、必ず突き当るギャップではないでしょうか。

そこで、こんなに想うでしょう。

「幼児の興味と理解に適するものばかりそろつて、幼児にふさわしい見聞と経験ばかり得られるものはないか」

これはいかにも虫のよい註文のように思われます。卒然とこういいだすと、一個の空想のようになります。され思われるでしょう。

ところが、それがあるのです。そんなに詮索しなくとも、目の前にあるのです。すなわち童話がそれあります。

◆ 童話の自由性と同化性

童話は、聴く者をどこへでも連れていきます。

たとえば、幼稚園で、親にはぐれた子猿が「お母さん、お母さん」と呼びながら、夕暮の山路をさまよいあらぐ童話をすると、聴いている園児たちは、日当りのよい明るい保育室にいることを忘れて、薄暗い山の中にいる

ように感じます。単に感ずるという以上に、その場の光景が、目の前にあらわれてくるほどの現実味が醸しだされるのです。そのように、森の中へでも、海のほとりへでも——子供がけつしていつたこともない、またゆくこともできないところへ連れてていきます。

しかも、忽然として連れていきます。今が今まで別なことを考えて、別なことをしている幼児が、「お話」といわれて、いざまいをなおして、その方に注意と興味をむけるとともに、もう彼等は山の中、海のほとりへ連れられていつてしまうのです。

それはかりではありません。聴いているうちに、園児たちの心は子猿の心にひきつけられます。子猿が悲しむと悲しくなるし、喜ぶとうれしくなります。つまり、猿の悲しみ喜びが、われの悲しみ喜びになります。單にそういう感情だけではありません。利害も一致します。子猿に利益を与えるものには、園児たちも感謝の心をおこし、子猿に害を及ぼすものには、園児たちも憤慨します。更に善悪正邪の判断も同じになります。子猿が善とするとこには、園児たちも憤慨します。更に善悪

正邪の判断も同じになります。子猿が善とするところは、園児たちも善として迎え、子猿

が悪とするところは、園児たちも悪として憎みます。すなわち子猿の精神は園児たちの精神に乗り移ってしまうのです。子猿と園児は精神的に同化してしまうのです。こうなるともう彼と我的区別はなくなつて、彼は我になり、我は彼になつてしまふのです。

◆現実的な経験を与える

人物事件を再現して共鳴感を喚ぶものは童話のほかにもあります。画や写真がそれですが、再現の方法がちがいます。絵や写真是固定的平面的なことを免れません。しかし、童話は画や写真のように形に制限されないので、それだけ自由自在です。童話の世界では川の中の光景は直に山の上の場面に移るし、遠く隔たつて思い合う母と子は、離れているままに同時にあらわされます。そればかりでなく、肉眼ではとても見えないその時々の気持のうごき、心のはたらきまで、はつきりと写しだされます。ただ写しだされるばかりでなく、その動きが刻々に動くままに、そのはたらきが次第々々に移るままで、あらわされます。これほど活動的に、立体的に、人物事

件を再現するものは、おそらくありますまい。

だから、童話に聴き入つて、話中の人物に同化したものは、話中の人物が経験したのと同じような経験を、自分の経験として経験するのです。唇を動かしてそれと同じ言葉をいつたり、手足をうごかしてそれと同じ行動をしたりしませんが、心中では、知情意の全部をはたらかせて、全心全靈を傾けて経験するのです。

おそらくこれほど実際に近い経験はないで

しょう。経験といえば、実際その場に臨んでそういう自己に遇うことですが、自分の心と身体はまるで別なところにいて、別なところで行われた経験に近いものを、心で経験させるのが、童話であります。前述の例をひけば、自分の心と身体は幼稚園の保育室にありながら、山の中の子猿の経験に近い経験をさせるのが、童話であります。

◆心理的選択論理的排列

あの東西もわからない頃はない幼児に対しても、童話はどうしてそんなにえらい作用をす

るのでしょうか。

複雑きわまりない社会人生は、はるかに児の興味と理解を超えているのですが、童話はその社会人生の中から、児の興味と親しみの深いものを選びだし、児の理解と感銘にふさわしいように排列したものであります。しかも、その選択も排列も、あちこちこちから寄せあつめて、勝手に組みあわせた寄木細工ではありません。心理的な観点に立ち、本筋工ではありません。心理的な法則にしたがつて排列されたものであります。

だから、童話の世界では、児が行き遇うもので、無関心無理解に過ぎざれるものは一つもありません。わけのわからないものにぶつかって迷うこともなければ、むずかしいことをおぼえさせられることもありません。すべてが心をひき、わが理解に訴えるものばかりです。だから、興味はいやが上に湧き、感銘はしみこむように透り、印象は奥深く刻みつけられるのであります。

といって、作者は童話を創作する際においては、一々の材料に対して心理学的な尺度を当てはめるわけでもなく、それぞれの構成に

対して論理的な検討を加えるわけでもないのですが、作者が心から子供を愛し、鋭どい芸術性をもつていれば、創作の際に、おのずからそういうはたらきがはたらきだすのであります。何となれば、子供を愛する心は児童心理的にならざるを得ないし、鋭どい芸術性は作品にきびしい必然性を与えるべき姿をそなえて、所謂天衣無縫ともいっており、あります。

◇経験的に広く豊かに

そういう童話が、どのようにして児童に与えられるかといえば、人物の活動も、事件の発展も、あるがままに、できるだけ自然に話されるのです。童話自身が豊かな自然性をそなえている上に、それを与えるのに、いさかも人為的な無理を加えないのですから、それを聴く児童がきわめて自然に触れるることは当然であります。教えられるとも、導かれるとも思いません。況んや、課せられる、強いられるなどとは毛頭考えません。恰も世の中

の実際の事件に、自然に触れるような心境で触れるのです。われ知らざる間に感じ化せらるので、まったく自然経験的であります。

だから、児童は現実にその事件には接觸しないのですが、接觸したと同じように、また同じくらいに、経験的に広くされ、深くされた獨特の作用といえましょう。

◆迂闊者不埒者不届者

社会化を重要な目的とする保育において、

できるだけ広い範囲のさまざまな経験を与えることを旨とする保育において、しかもそれを児童の興味度と理解度に即してなされねばならない保育において——童話というものが、あることは、保育する者に取つては、何とう有難いことであり、保育される者に取つては、何という幸福なことでしょう。

したがつて、それを充分に利用しない、熱心に活用しない保育者があつたとしたら、天

倉橋惣三先生が、永年に亘り考究された児童保育の真のあり方を、体験によるうらづけと、先生の美しい心のままに、平明に描かれた書で、児童教育にたずさわる先生方が、必ず一度はお読みになつて、ほんとうの意味の幼稚園の理解と、

倉橋先生のりっぱな児童觀を、会得していただきたいと思ひます。

☆幼稚園教育界における 倉橋惣三先生の二著

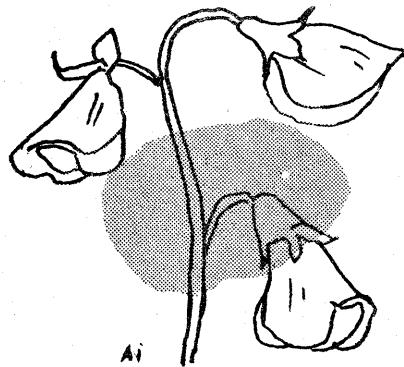
幼稚園真諦

B六判一四六頁定価一八〇円

子供讀歌

B六判三四四頁定価二六〇円

フレーベル以後の幼稚園（3）



Ai

津 守 真

第二章 幼稚園の発展

幼稚園連盟——社会改良と幼稚園 幼稚園という新らしい教育機関が樹立されて、一度び社会から受け入れられても、それが更に大規模に拡張するには、それだけの主張と、又足場とすべき機関とを必要とした。そして幼稚園が児童救済の機関として如何に価値あるものかを示さなければならなかつた。子供達に最善の環境を与える、子供達を望ましくない社会の影響から守れ、というのが発展期の幼稚園のモットーであった。いろいろの種類の社会機関がそのモットーの下に幼稚園の設立を助けたが、中でも特に大きな貢献をしたのは、米国各地方につくられた幼稚園連盟である。一八七〇年代からぼつぼつとつくられ始めた幼稚園連盟は、一八八〇年代には著しく増加し、一八九〇年代の末には、米国全国で四〇〇以上に上っている。これらの幼稚園連盟が共通に目指していたことは、第一には若い母親達に、子供の教育と問題とを正しく見て正しく扱うことを指導することであり、第二には、幼稚園を設立して幼稚園運動を促進させることであり、第三には次第に高まってきた博愛主義を実地に行なうことであった。此の第三の点は前にも述べたように発展期の幼稚園の特徴として特に注すべき点であり、幼稚園が社会的に進出し發展してゆくためにも、少くことの出来ない要素であつたし、又幼稚園運動を推進させる原動力でもあつた。博愛主義、即ち人類愛の見地に立つ時に、現実の社会に行なわれている不正、不徳が問題になる。現実の社会の悪から子供を保護し、更に社会改良の一端

を荷うことが幼稚園の使命と考えられた。そこで幼稚園連盟によつて設立された初期の幼稚園は大部分、無料の幼稚園であった。此の様な博愛主義が幼稚園運動の促進にどのような力を持ち、幼稚園教育としての実際とどのような関係を持つたかということを、初期の幼稚園連盟の一つを例にとって見てみよう。

一八七八年に、博愛主義者であり演説家として知られていたフェリックス・アドラー博士 (Felix Adler) がサンフランシスコで幼稚園に関する一聯の講演を行なつた。その中で彼はニューヨークにおけるフリーキンダーガルテン (無料幼稚園) の成果について述べ更に幼稚園設立の必要性について次のように述べている。「不良化予防のために慈善事業をしようとする時にいつもぶつかる問題は、都市の貧困生活からくる悪である。その根源は児童の教育の欠如にある。米国においては、ヨーロッパにおけるほど、社会問題は切迫していないが、われわれは都市生活の貧困ということからくる諸悪がわれわれの社会の脅威となることを防がねばならぬ。我々は幼稚園教育を創設して、それによって来るべき世代を破壊から救うべき使命をおびてゐる」と。(註一) 此の講演に刺戟されて、聴衆の一人であつた一市民、ソロモン・ハイデンフェルトの提唱によつて、サンフランシスコ幼稚園連盟が生れた。此の連盟が後援してシルバーストリーント、キンダーガルテンが創られ、ケート・ダグラス・ウィギンズ (Kate Douglas Wiggins) が最初の保母となつた。彼女は後に「サニーブルック農園のレベカ」「小鳥のクリスマスカロル」等の文学作品を通して知られている。まだ学校を出たてのケートは

その保母の最初の日から多くの困難にぶつかった。その幼稚園の附近は貧民街であり、「荒くれた街の悪童達」が彼女の子供達であったからである。その汚い街の袋小路の間の子供達の家庭を訪問している中に、最初は敵対的であった母親達も、次第に献身的なキンダーガルトナー達の努力に友好的な態度を示すようになつてきた。ウイギンズ女史自身此の間の事情を述べている。「袋小路の間の、子供の家の扉に通ずる階段をよろめきながらのぼつた時、その長屋の一番上の窓から一人の婦人のかん高い叫びが聞えた。それは敵対的な口調ではなかつた。『ちらかつてゐるものをおかたづけ。がき共の先生がくるよ。子供の守護者が来るんだよ。』ユーリーカ、しめたと思つて私は微笑した。こゝでは十分に私は理解され始めている。キンダーガルトナーは子供の守護者になつた。此の呼び名に幸あれどんな高貴な尊称も、此の新らしい呼び名よりも嬉しいものはないだろう」。(註二)

こうして幼稚園は社会の底層に触れていた。街角には真鍛のバッチをつけた子供の守護者が立つて、道行く人によびかけた。「皆さん。もしも私達がもつと沢山の幼稚園を開くならば、私達は立ちどころに刑務所を閉鎖することが出来るでしょう」と。

幼稚園は社会改良に貢献するものとして人々に訴えられた。しかし小さな子供達の集まる幼稚園が社会改良と家際にどんな関係があるのだろう。ウイギンズ自身云つてゐる。「一寸よく考えてみればそれはいかにも大きさな云い方である。幼稚園が津々浦々にまでつくられゝば、『刑務所は立ちどころになくなるでしょ、皆さん』

と云うようになるだらうか。どんな樂觀主義者でも、そう簡単に社会改良が行なわれるとは思わないだらう。もつといろいろの調査を行なわなければならぬし、対策も立てられなければならない。

幼稚園はたゞこの穴の一つを埋めようとするだけである。それはやつと子供の足の入る位の小さな穴である。だが大きな世界の仕事の一つである。』

「治療というには過去の声であった。予防というのが今日の聖なる囁きである。幼稚園が社会改良と関係をもつのは、教育という仕事を通してである。教育は惡の蔓延を防ぐということに直ちに賛成するだらう。だが事實我々の過去の教育制度は、我々が希望したような結果を生んだらうか。事実、教育の計画がもつとよくなれば、人は教育によつてより良くはならないだらう。『すべての子供達は学校にゆく』だがそこに行つて殆どすべての子供達が教育されない。子供と人間性と、宇宙と生活全体に関する、フレーベルの考え方、——幼稚園の考え方——は大部分の親や教師達とは些か異なる結果を生んだらうか。事実、教育の計画がもつとよくなれば、人は教育によつてより良くはならないだらう。』……」

発展期のキンダーガルトナー達は此の様な意識を持つて幼稚園の仕事に献身していた。勿論すべての教師達がそうではなかつたろうし、實際がどこまで結びついていたかは疑問であるし、又ウイギンスも云つてゐるように、小さな子供の教育と社会改良との間にはまだいくつの段階がある。けれども社会の博愛主義の風潮と共に、幼稚園が博愛主義に訴える主張を持っていたことが、幼稚園の発展を促がし、その仕事の巾を広くしたことは事実である。単に過去に

そういう事實を持つていたというだけではなく、教育全体が社会の向上を目指すものであり、内容と方法を伴つてその方向に廻転しつづけることが今日の問題である。

さて、こうして各地に生れた幼稚園連盟によつて實際に行なわれた事業として次のものを挙げることが出来る。

(1) 母親學級が各地に作られ、婦人達の教育問題に対する関心が養なわれ、幼稚園設立の母胎ともなつた。母親達は次第に局部的な小さな会合では満足せず、数日間に亘つて共同宿泊会合、キャンプ会合も行なわれ、子供を同伴して共に教育を受けるような試みも行なわれた。一八九七年には、それらが結成して全国母親連合が生まれている。

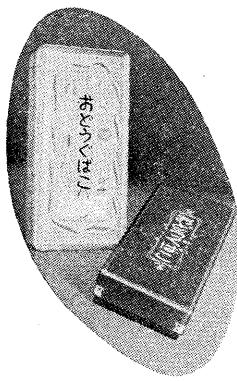
(2) 幼稚園の設立はその主たる事業であった。市によつては市中の幼稚園が全部幼稚園連盟によつて設立されたものであつた。一九一二年の統計によると、米国全国で二百九十七の幼稚園が幼稚園連盟の設立によるものであり、全幼稚園の四分の一に当る。千八百年代の終りにはその数がもつと多かつたものと想像されるが、詳細は明らかでない。

(3) 大都市の貧困問題に対して、婦人達を啓蒙したこと。母親達は児童研究によつて教育に関する関心を高められたが、同様に、幼稚園連盟を通して貧困問題と直接に触れる機会を持つたことから社会問題に関する関心が高められた。そして當時起つたばかりの社会学的研究グループが作られ、職業指導所、遊園地、セツツルメント等の活動が行なわれた。

定評のあるフレーベル館で!!



おさいくちょう



おどうぐばこ



じゅうがちょう

昭和三十年度の新学期用品が完成いたしました。昨年より一層よい出来栄えだと、自負いたします。幼児になじみぶかい、くだもの花の観察をあわせ編集した出席カード、美しい装幀のおさいくちょう・じゅうがちょう、内容を特に吟味したおりがみ・くれよんなど、いずれも幼児教育にはなくてはならないフレーベル館の新学期用品です。なお、右のほか別記の通り、いろいろと取揃えてございます。お申込みは、フレーベル館または代理店へ!

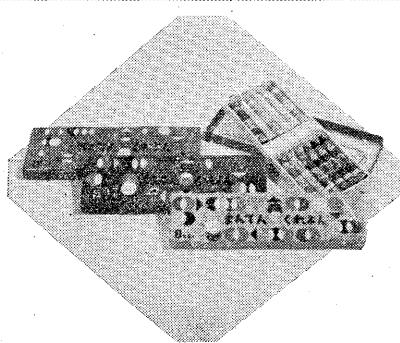
番用 号品	名
四七	園籍簿(用紙)
七二	出席席簿(用紙)
四八	身体検査表(用紙)
四五	保育日誌(A)(用紙)
四六	保育日誌(B)(用紙)
四一	幼児指導要録(用紙)
五三	卒園台帳(用紙)
四三	児童票(用紙)
五六	保育証書(大)(A)
五四	保育証書(大)(B)
五七	保育証書(小)
六二	賞状用紙
五八	園児募集ポスター(A)
五九	園児募集ポスター(B)
六〇	園児募集ポスター(C)
五一	園のたより
五〇	つうえんブック

幼稚園・保育所の新学期用品は

一六〇	七四	一六七	一六九	一六八	二二八	二二七	二二六	二二五	二二四	二二三	二二二	二二一	二二〇	二一九	二一八	二一七	二一六	二一五	二一四	二一三	二〇一	七五	番用 号品
は	出	え	樂	し	い	お	仕	事	(N.o.1)	自	由	自	由	自	由	自	由	自	由	自	保	出	綴
さ	席	あ	る	い	い	く	さ	い	こ	由	画	画	帳	(特	大)	帳	(C)	帳	(B)	帳	(A)	出席	カード
み	々	そ	う	り	り	く	さ	い	り	ぬ	ぬ	ぬ	り	え	(上級)	え	(初級)	え	り	り	料	込	品
										さ	い	く	帳	(大)	帳	(小)	帳	(中)	帳	(小)	袋	表	名
																					袋	紙	



園児募集ポスター



まんてんくれよん

一三四	一三一	一三三	一七一	一五九	一五六	一五七	一五八	一五九	一五六	一五七	一五六	一五九	番用 号品								
折	折	折	組	札	札	札	札	札	札	札	札	札	札	札	札	札	札	札	札	札	品
紙(並製四寸)	紙(並製五寸)	紙(特製四寸)	紙(特製五寸)	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	色	名

幼稚園の研究活動が近頃極めて盛になつて来た。これは喜ばしいことである。

仕事をしている所には、たえず工夫と向上が必要なので、向上のための工夫がなくなつたら発展がなくなつてしまふ。こ

ういう意味で幼児教育の分野でも研究を重ねることは重要である。同時に、研究の成果としての知識を広くとりいれる

ことは大切なことである。しかしながらもしも研究のために教育活動が鈍るといふことが起つたら、本末顛倒である。研究

編集後記

本誌においては、幼児教育の分野における研究の問題や、研究の成果を、現場から又研究室から、広く求めているが、それは上のよな趣旨からである。今後どのようなものが生れてくるかを期待している。勿論研究は大きな教育の中の単に一部分であつて、幼児研究の強みがある。研究は作るものではなくして生れ出てくるものというのが教育の研究であろう。幼児教育の研究、幼稚園における研究、保育の研究は、未だ

体をなしていない部分が多く、今後の問題が多い。そのような現在、どれだけ足

を地につけた歩みをなすかは重要なことであろう。学者の研究と現場の研究とは、その方法や規模において、相違が出来てくるのは当然であるが、両方が互に補い合つて進みたいものである。教育の現場でなくては出来ない研究があるだろ

うし、学者でなくては出来ない研究もあるだろう。何れもが最も良き保育の進展を願つて進みたい。

東京都中野区千光前町一〇

編集兼倉橋惣三

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学附属幼稚園内

日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 東京都千代田区神田小川町二ノ五

凸版印刷株式会社

発売所 東京都千代田区神田小川町二ノ五
フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

○本誌御購読についての御注文は発売所
フレーベル館にお願い致します。

幼児の教育 第五十四卷 第四号

定価金五十円

昭和三十年三月二十五日印刷
昭和三十年四月一日発行